## 3　菊名のあめや踊り

### 記録

### （1）昭和三六（一九六一）年のあめや踊り

### 上演時に菊名区へ送付された案内状

（保存会より提供）

秋冷の候　皆様には増々御健勝の事と存じます。扨て、十月二十三日は菊名白山神社の祭礼に当りあめや踊りを例年通り開催致したく存じ上げます。このあめや踊りは神奈川県無形文化財に指定されております。御多忙中とは存じますが万障御繰合せの上御観覧下さいます様御案内申し上げます。

敬具

記

一、日時　十月二十三日（月）午後六時

一、場所　菊名白山神社前

菊名青年会長　石井盛夫

主催　菊名青年会

菊名女子会

後援　菊名消防団

菊名保存会

菊名婦人会

プログラム

| | 種目 | | | 種目 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 白松粉屋 | 手踊 | 13 | 子守 | 手踊 |
| 2 | 高　砂 | 新舞踊 | 14 | 十兵衛 | 劇 |
| 3 | ソーラン渡り鳥 | 〃 | 15 | 祭太鼓 | 舞踊 |
| 4 | 笠松峠 | 劇 | 16 | 新　川 | 手踊 |
| 5 | 杳に迷う | 舞踊 | 17 | 草津節 | 舞踊 |
| 6 | 木曽節三度笠 | 〃 | 18 | 阿漕ヶ浦 | 劇 |
| 7 | 細田奴 | 手踊 | 19 | 宮津節 | 舞踊 |
| 8 | 真室川音頭 | 舞踊 | | | |
| 9 | 新串本節 | 〃 | | | |
| 10 | 五段目 | 劇 | | | |
| 11 | 母恋鴉 | 舞踊 | | | |
| 12 | かきがら | 手踊 | | | |

### 台本

### （1）現行の演目の台本（「五段目」のみ画像掲載）

### 白松粉屋

出し…よい　白松の娘めェ　ヤレナーァ・・・
ヨホホイ　ヨーォ・・・オォエー
唄…　さぁ　ちょいとォ　ちげねェなァー
ア、向（むこ）な　茶屋からちょいと出て踊るのは、あれがまた白松の粉屋の娘か、なるほど良い娘（こ）だ　あの娘（こ）と添（そ）うにはァ　朝も早起き　お水もくんだり、手鍋（なべ）も下げたりー
三度に一度は、人（ひと）の目も忍んでおまんまも　炊（た）きましょー　となんやれ
（ながし）…粉〜屋〜の娘ーーエー
エーェェーエエーーー
ヤレナァー　ヨホ　ホイ　ヨオーォオ
オーエー
（唄）
さぁ　ちょいとォ　婿（むこ）だよォー
あのや又、粉屋の婿となるには、愚かじゃなられぬゥーあのや　又、粉屋は、一代や二代の粉屋じゃござらぬ、親の代から先祖の代から　孫、曾孫（ひこ）、玄孫（やしゃご）や、ひっくるけって、きしゃごの代から　ちょうど　私で　十代　伝わる粉屋であればな、お家のご商売、肩が痛しと足が弱（よわ）しと泣き泣きながらも　粉の箱担（かつ）いだらぁ　西は七浦（ななうら）　東は　九十九里　太東（たいと）の岬（はな）から　八日（ようか）の浦（うら）まで　くるりこと回りて　粉　良し　良しとな、売らずばなる

まいぞなんやれ

（ながし）…粉ー箱ー　かーついぃー（で）

ヤレナァー　ヨホ　ホイ　ヨー

オーォォエー

唄…　さぁ　ちょいーとォ　次だよォー　皆様

ご存じ東海道はな、五十と三次（さんつぎ）

花の　お江戸は、ご天下様のな　お膝（ひざ）元から　日本橋から　芝や品川、川崎　神奈川、保土ヶ谷、戸塚や、藤沢、平塚　大磯、小田原、箱根の　小高い所で　ここいらで　止（と）めましょ

よォーくもォ　止めたよー　小夜（さよ）の中山（なかやま）　夜泣きの石はな　名所の事ならぁー　あのや又辺りや近所で十三や四、五になる姐（あね）さんたちがよォー　上る　道者（どうしゃ）や　下る　道者（どうしゃ）の嫌だなんぞとおっしゃるのを　無理にとっつらまいて小松の木陰やー

小杉の間で　あめでもちょつくよに　餅（もち）ではいを取る様にー　せなずばなるまいぞ　なんやれ

（ながし）粉ー　場屋（ばんや）で　ひくとんもー

セリフ…やれおせ　そーこだオヤ、そこそこそっことしめ込め

裏方　山椒（さんしょ）の擂子木（すりこぎ）くるりと回せば　どうやらこうやら子になるとうな、おぶたも　抱（だい）たもちょろ　ちょろ　歩くも　飴買いに行くのもお前と私と　毎晩かかって　こしらえた子だもの　良い子ができねでどうする物（もの）か、小僧や小僧や一升桝（ます）持って来い

唄…　はかるー　とんもー　さあよーォォー・・オーオオオ

オオオオ、ぉあんの娘（こ）は良いー子だ　どーでぇーも真実　添（そ）わねでヤレナァー　アアアー　ヨオーーオーヨーオオォーーーォオ　ォォーーーヤレナァーーァァ　ヨホオイ

ヨォー・・オオエー

**新川**

ながし…ほうのさんへーー・・・

唄…　ほうのさんへーェェーェ　あれが新川地引きの娘か　なるほど良い娘（こ）だ。あの娘（こ）と添うには、三年三月も裸になりとも　茨（バラ）でも　しょいましょよ、

セリフ…「おや、うんとこ　しょってもなんともござらぬ。」

唄…　それは又、おろかよ、たとえ火の中、水の底なりとも、いといはせないでー　ほうのさんへーェェーエ、やれ　婿（むこー）となりたいなーぁ　ぁぁーぁ　婿（むこ）となるには、お家のご商売。網（あみ）でもすいたり。掛（か）けたり、干（ほ）したり、網端綱（あばづな）縒（よ）うたり。あばの　付けよや帆（ほ）の上げ下げ水縄（身縄）（みなわ）のふんじめようや帆あしの取り様（よう）や両帆（りょうほ）のあてようや　手縄の加減（かげん）は誰にも負けない櫓（ろ）を押します

セリフ…「やれ押せ　そーこだ」

裏方…「おや　止めたりしよ」

私も腹から船頭（せんど）さんの子だもの　面舵（おもかじ）や取り舵（かじ）を　知らねで何んとしょーほうのさん

へーェェーェ　まき（木の意）の茶船（ちゃぶね）んで　はまぐり掘りゃやるとんもおおい、さて　こりゃ真実　添（そ）わねでなんとしょー　ほうのさん

へーェェーエ

そこで　葛西（かさい）を　ほめるのじゃ
ないけれども　どなたもごめんなさい
葛西（かさい）　下（しも）まえ新川名所
は、女娘（おなご）の良い所で当所（とうしょ）、氏神（うじがみ）香取のお稲荷
（いなり）さんや　熊野（くまの）の権現
（ごんげん）さんへ修業して拝（おが）みなせ　あの娘（こ）さんも出てみな、この娘（こ）さんも出てみな
利根の大（だい）川　上（のぼ）りや下（くだ）りの　高瀬や茶（ちゃ）船ん　あまた　名所よ　ほうのさんへーェェーェやれおぉーーおー　めでたいなー

**かきがら**

だし　あれ見いさいよなあーあーあみーさーい、あみいーさいーなあーあああ
あなぜかそうだよ、何でえましょーエー
唄　おや、なつみのだいでなちげねぞうみをよみればこりゃなよよへ　おやかきがらほるのだ、かきがらほりがなそこいらでしりをふふりますなこりゃなよよエー
おやおやおきゃくのごちそにそこいらのこす、みでもひとつおつぷれおふりふりますふりますなあーなぜかそうだよなんでエましょうへー
おやおもしれおもしれおもしいろしいろやなしいろうよなあ。なぜかそうだよなんでエましょうエーそのあとそのあとそのあとあとでエなあ、あとでよなあーなぜかそうだよなんでゑましょうエー
おやーおばだーおばだおきからーおさーやゆだんができねおきからこらーおがさすーおがさすこりゃさーきたならほりいたるこりゃかきがらがみんなあげーおでながれるから、まんがんおこりゃかついだりいじょれんをこりゃでにともちめかでなんぞをもつてきなさいのめかごなかにとつめこむのだ。やれはいれはいれそれはいれはいれすてこめどつこいうんとこかついでべらぼにおもたいなんたらことだたまげたことだとありゃあがりよめめさるなこりゃなあよよおーエーさあちょうべとこりゃきんざぶろうとおさよなじみのさくのじょとむかしむかしのいろこいばなしたがいちがいにおっつけ、つっつけやて、やあてくるこりゃむこうからそれをみそめてあがるべとすればとんだところにぬかりこんでどぶどぶとぬかりこんでけつまずいてこりゃころんだよ　こしのほねをいためたよ、ひざのかわまですりむいたよ、ひとがみたらばわらうかとおもてかにお（を）ほうるこりゃふりをしてそこいらここいらをなぜまは（わ）せばみしまおこぜにさされたよ　なくつらこらはちがさす　それはまだこらよけれども　かににきんたまをまたはさまれた。
「おおいてな。」おやいたかんぺ「まつかなちがでてこんなになつた」どうしよべなこりゃどうしょべどうしょべなのたんほさんでありあがりよめめさるなこりゃなああよようおう・・へ・・

**笠松峠**

出し…　つーー津軽のー　そうだよなあーあーー津軽の御城下
唄…　国はこれより北にと渡りて津軽と南部の　その国境（くにさかい）に　音に聞こえし　笠松山とて　峠がござるよ。そのな、山には、五年この方（かた）女山賊（オンナサンゾク）鬼神のお松が住みかをいたすよ。　それとは知らずに　出羽（でわ）の守様（かみさま）ご家中（かちゅう）においてな。　夏

目弾正(なつめだんじょう)四郎三郎(しろサブロウ)はな、殿(との)の御用で、御用金飛脚(びきゃく)に、金子(きんす)二百両、腰にと下げてな、華(花)の東(あずま)へお下りなさるよ、運(うん)の悪さや　かかる峠で　おなごに殺され　不思議な夢見(ゆめみ)が再々(たびたび)あればな　そこで仙太郎、我が君様　(きみさま)にと願書あげれば我が君様のな、おおせの事には　これぞ仙太郎　親の仇(かたき)とあることなればな、守備(しゅび)良く打ち取れ、丸に四つ目の羽織頂だい、大小衣服(しょいふく)や鮫鞘(さめざや)、白鞘(しろざや)、金子(きんす)とまでもや残らず頂だい。かかる峠が　笠松山だよ、その名(な)、山の名　麓(ふもと)においてな、福芝町(フクしばまち)とて　小村(こむら)がござるよ、そのな　村から　出張り(でっぱり)の　こみず茶屋が　三軒ござるよ。そのな、茶屋の名を　こまかに読めばな、「亀(かめ)屋」「蔦(つた)屋」に「若松屋」と申すよ。中なる「蔦(つた)屋」は、我が君様のな　お休みなされたお茶屋であればな、そこで仙太郎腰うち掛けてな、休まんければな　間(ま)もなく近寄る　そこで仙太郎―

セリフ

仙太郎…こおら　宿の亭主　御免(ごめん)下(くだ)されや

宿亭主…これはこれはお侍い様、お早いお着きでございます

仙太郎…今日(こんにち)の日の刻限は　何時(なんどき)にあいなるや

宿亭主…ははぁ　こんにちの日の刻限(こくげん)とおっしゃっても　私ししかとは存じませぬが　もう八ツ半　かれこれあり七つにもなりましょう。あなた様は　この山ご存じにてお登りあるか、または　ご存じのうて　お登りあるかは知らねども、この山には五年このかた　女山賊　鬼神のお松とやらが　住み家(か)をいたし、若い者をば恋路でだまし　年老り子供は、切り取り、強(ごう)取りこれぞ一人(いちにん)のがさずやらずお松が働き。私し宅(わたくしたく)は　すのこの縁(えん)にかやぶきの屋根　お見苦しゅう存じましょうが　今宵(こよい)一夜(いちや)お泊りなされては　これのういかに　お侍い様

仙太郎…なあに　言うて　くれるは　先般(せんばん)　忝(かたじけな)いが、一合とりでも武士の道、それ聞かずば　今宵　一夜泊まりて世話にもなろうがそれ聞いて泊まりたなら殿の外見(がいけん)我が身の恥辱、しからば笠松山(ざん)へ　さしかからんとな

宿亭主…ははぁー　これはこれはお侍い様　是非にも及びません、お帰りの折(せつ)にごゆっくりとご休息重ねて　お目にかかりましょう

唄…えー　笠松山にと急(いーそー)がーるーそうだよなぁー　あーやれそおーなーやれー　そうだよーそれは間もなく笠松山だよ　そのな山はな　上(のぼ)りが三里で下りが三里で両方合わせて　六里の峠よ　上り三里は、一里一里に、名所旧跡　立場(たてば)がござるよ　一里上ぼれば　熊もおどろく不動が滝だよ　二里と上ぼれば

岩で刻んだ　十二楽師よ　三里頂上は
ちくまん滝とて　風ももらさぬ　屏風
（びょうぶ）な岩屋に鬼神のお松が腰
うち掛けてな
（お松出）はるか向うをながめて見ればな　侍
い姿が一人（いちにん）見ゆるよ　あ
のや侍い旅の疲（つか）れか　足の運（はこ）びよや腰の重さを　金に積（つも）
れば二百両余りの重さと見ゆるよ　あ
いつだましてあの金　取ろうと我が身
ながらも喜びますれば　鬼神のお松は
女心（おんなごころ）の細き声して申
し申しと呼ばはりければな　まもなく
近よる　そこでお松は

仙太郎　なにやら　山奥で　申し申しと　呼ば
わる声　きつね、たぬき、むじなの仕
業（しわざ）か　まん魔性なものか
化生（けしょう）なものか　これにて
正体現わせろ

お松　全くその様な者ではござんせん

仙太郎　全くとは、謀り者（たばかりもの）こ
の山三里下　水茶屋で聞いて覚（おぼ）
えある　鬼神のお松とは、おのれがこ
と、騙（かた）り落（おと）とそうと
の了見（りょうけん）この度（たび）
は助けん　覚悟（かくご）いたせ

お松　全くさ様な者ではござんせぬ（ん）こ
の山　三里下清水川　名主武左衛門の
娘でござんすが　フクシバ町にと嫁子
（よめこ）にやられ　縁が無いのか　亭
主には嫌われ姑には憎まられ　今朝（け
さ）の寝起（ねおき）に離縁状を取り
かけいだしたるものでござんすが　ご
存じの峠にて　裾からは西風に吹き上
げられ　持病のシャクに。　閉（と）
じめられ、はなはだ難渋　伏せおおた
者でござんす

仙太郎　なあに、この山　三里下　清水（しみず）
川名主武左衛門の娘とな　武左衛門は、
さすれば我が殿より御紋付（ごもんつ
き）御拝領（ごはいりょう）五百石
を頂戴いたし　または帯刀賜わり侍い
国でも朋輩同様なる人　見れば幼な顔
も良く以ておるよう　思わくがあるな
ら　これにていちいち　語れや女な子

お松　はいありがとうござんす
貴方（あなた）様　にお持ち合せのお
薬　がござんすなら　それを一粒（りゅ
う）ふ振舞（ふるまい）なされては
これのう　いかにお待い様

仙太郎　なあに薬とな、薬は幸い　この方（ほう）
が懐中（かいちゅう）に、仕込みおお
たる伊勢（いせ）で名方　朝熊ヶ岳の
万金丹（まんきんたん）これを一粒（い
ちりゅう）くださるには　早や両手を
さし出せー

唄　両手をさし出し薬を頂だい　飲んだる
振（ふ）りょして後（うしろ）をう
つ向き　草場の中にと　薬（くす）りょ
投げ捨て　ニッコと笑って
そこでお松は

お松　はい、おありがとうござんした。貴方
様のご懐中にお待ち合せのお薬にて持
病のシャクも全快いたし、貴方様は
神か仏か　命の補修でござんす。何か
御礼いたしとうござんすが何分　この
女な子の身にとってみれば現金は持た
ず　あー思いついた　この山下り　三
里の道案内でもいたしましょう
こおーら、曲（くせ）者　現われたあー

仙太郎　足の痛むときの薬をやったのに　なあ
に持病のシャクが全快いたすものか

鬼神お松とは、おのれが事　夏目弾正
四郎三郎を打ったは　おのれに相違な
し　夏目弾正四郎三郎がせがれ　夏目
仙太　親の仇　いざ尋常（じんじょう）
に立ち合って勝負なせー
お松　鬼神お松とは誰からのお尋ねやら鬼神
お松と知っての事なら返り討ちくわぬ
よう　いざ尋常に勝負なせー
仙太郎　心得（こころえ）たり
お松　讐（しゅう）を捨てて逃げるとは卑怯（ひ
きょう）なやつ　もうひと太刀　立ち
合って勝負なせー
仙太郎　なあに　こしゃくな　えい
こーらお松　われを敵（かたき）と思
うなよ　夏目弾正四郎三郎（しろさぶ
ろう）を討ったゆえ、おのれの命は助
からん　おのれの宗旨は、日蓮宗旨か
浄土宗旨か知らねども、両方合わせて
南無沙法蓮陀仏　地獄になりと極楽に
なりと　おのれの勝手におしゃしが
れー　親の仇も守備良く打ち取り　大
願成就かたじけなし　しからば我が国
をさして急ごうかー　こう言う時の神
頼み　乞いの一巻　御敵退散　しから
ば我が国をさして急ごうかー
唄　我が国をさして　急がるるよーおー
えー

**手踊**

**子守の唄　桜節**

**【一ツトヤ…糸桜は菊名では歌わない】**

一ツトヤ　人はともあれ二人の仲は
　切るに切られぬ糸桜
二ツトヤ　ふすまひとえはこいじの関所
　あけていわれぬ岩桜（傘）
三ツトヤ　未来までも約束すれど
　君の心はうそ桜
四ツトヤ　よしやちかくにおりさいすれば
　ふみのたよりをよきく桜（傘）

**かぞえ唄**

一ツトヤ　ヒトヨあければにぎやかで
　おかざりたてたり松かざり
オヤ二ツトヤ　ふたばのまつはいろようで
　三がい松はかづさやま
オヤ三ツトヤ　みなさんこどもしゆは、らくあ
そび
あないち、こまどり、はねをつ
く
オヤ四ツトヤ　吉原女郎衆は手まりつく
てまりのしようしはおもしろや
ど～でとうじ　わからぬのは、につこにこ　し
よさん。たまごにめすおす、またもわからぬのは、
お前さんのこころいき、（だよおい）　サノまだ
まだよ　おい　およそ黒いのはからすにがつし
よく、たどんやのてまとり、またも黒いのはぼ
さんこに火の見やぐら　サノまだまだよおい
わたしや子供を三人もち、ひとりの子供は、よ
つしよにかねまよ、あとの二人のおんなのこは、
よたかにふなまんじゅう　サノまだまだよおい
わたしやどうでもこうでもあのひとばっかりや
あきらめられぬによって江ノ島の　弁天さんへ
めだかのひものあげ　サノまだまだよおい
ことば　おやおやこのこは、羽根をついたりま
りをついたりすれば　あれまあちちなん
んぞはましてはなんだね、ちちなん
どあましてもよいからこんなきれいな
お屋敷で、しいなんぞしなさるなよ。
あれまあ、ゆう口のしたからなんだね。
しいなんぞしてもよいから、お母さん
の処へ連れて行くから泣きなさるなよ
こんななく子のお守りをするのはわた
しらが上手だ、ねんねこしよう。
おやねんねのお守りはどこへいた。

お山を越えて里へいた。
おや、お里のおみやになによもらった。
でんでんたいこにしようの笛、おきや
がりこぼしに風車、山の中の兎はなに
よ見てはねた。
おやほうたるほうたるあつちいけ
ことば　ほたる虫なんぞあつちへいてもよいか
ら村のお若い衆さんはこちらへござい
ませ、なんのごちそうもなけれども、
やきいもの二、三本は、たてひきましよ
う。おお、はずかしい　さあ、ぼうや
帰ろよ
唄　さあ　なんのかのとて帰りがけだよ
え・・え・・そよ・そらそら
あとはながし・・・・・・・・
さあーよーえーさあやれやれう・オヤ
なだこりゃよ・・エ　オイヤ　オーオ・・
オオオイヤ　ラララララ・・・エ

**細田奴**

出し…　十七が川を渡るよなぁー
唄…　そんれ誠よ　右は小松原　左は浜じく
浜で千鳥が　山の中の兎の様に
跳（と）んで出る　十七　はるか　向
こうに　白く　ちらちら　白波（しら
なみ）打つのは　あれこそ誠の　細田
の　小川には　違いねェの真ん中だよ
あぁー　いんやこりゃ
ながし…こんおー　小川にーーーぃーー　さて
は（わ）よーー
そんれ誠よ　ここが　細田か　細田の
丸木橋　渡らば　十七　当世（とうせ）
流行（はやり）の　横縦縞（よこたて
じま）の前掛けに　桔梗縞の　ひもを
付け　雨も降らないのに　蛇の目の
から傘　あー　ちょこ　ちょこ　ちょ
い　と　さしかけて　なー
語り（セリフ）
奴…　よいと来たり　見れば女（お）な子の
一人旅　そして　お前は　どれから
どれへの　ご通行の　者でござんすや
女…　これ申し奴さん　私は　葛西領（かさ
いりょう）宇都宮（うつのみや）在か
ら　銚子の観音様へ　参詣（さんけい）
に　参る者で　ござんすが　道が知れ
ませんので　奴さんを　見かけに　お
頼みでござんす
奴…　えーへん　この奴を　見かけに道を聞
こうと言うのかえ
女…　いかにもさようでござんす　と言
（ゆ）って　この橋は何と言う橋でござ
んすか？
奴…　エッヘン　この橋かえ（い）？　お前
は知るまいが　葛西領でも名も高き
細田の　マラ…　おっと　マラでな
かった　ま　丸木（まるき）の一本橋
そして　この橋の下には　昔は　大き
な大蛇が住み　今は大きなカメが住み
そのカメのエカイ事エカイ事この奴ら
の様に　指（いび）は細（みじ）かし
とも　まぁ　回りかねる程のカメ　そ
して　この奴の様な　つまらない者が
通ると何の事もないが　そら　お前の
様な　めめ美しい　姉（あね）さんが
通ると　袖（そで）を引き（持ち）　褄
を持ち　づづらづーっと　引きずり下
がる　カメだによって必ず　ご油断
なさらぬが良い。
女…　そんなら　奴さん　怖い　橋でござん
すねぇ
奴…　あぁ　怖いとも怖いとも　煮ても焼い
ても　食べられる橋じゃござんせん
女…　そんなら　奴さんの　お手引（てびき）

で　通して　下されば　なお　ありがとうござんす

奴…　エッヘン　この奴が　飲み込んだしょうがん（賞翫）大しょうがん渡ってしまうと　その後（あと）が難しい

女…　その後の　難しい　のは　何んでござんす？

奴…　何んでもない　そのものよ

女…　おや　ものでは　わかりません

奴…　もので　わかるまい　この橋を渡るにはまず第一に下駄を脱ぎ下駄をぬぎます

女…　タビを脱ぎ

奴…　タビを脱ぎます

女…　小褄（こづま）を取って　日傘をつぼめ

奴…　小褄を取って日傘をつぼめ　これで奴さんよろしゅうござんすか？

女…　それで　吉野の山桜　この奴が先に立つから　そなさんは後（あと）からこうりゃ

唄…　ちょろちょろ　静かにながめて渡りなせ　あぁえんやこりゃよー　おーなーを　さしてはよー　おーおーうーー

奴…　うァー　おーおーあーりぃー　この橋も　何んなく渡ってみれば　お前も　めでたし　そして　この奴もめでたし　そしてお前は　銚子の　観音様に　参詣に参るとも　どうともこうとも勝手になさるが良い

女…　奴さん　おおきに　ありがとう　ござんした　奴さんのおかげで　おおきにひまを取り　銚子の　お観音様　に参詣に参るのに遅（おそ）くなりては悪い　ご縁ござりましょうなら重ねてお目にかかりましょう　こんにちはおさらばでござんす

奴…　おっと　姉さん　待たっせ待たっせ　何んだい　この女みせ　この奴も　重ねて　お目にかかりたい事は　かかりたいが　何故（なぜ）か　この多勢（おおぜい）人様の中で　ちょっぱだけてちょっこんで　まず　まぁ　そんな事は　してもおられまい　こんにちはおさらばでござんす

裏方語り…さらばさらば　と両方に立ち別れて行かんとせしが　立ち止まりておる所に・・・

女…　はるか向うに白きものが見える　あり　ゃ　何ぞ　怖いものでなけりゃよい・・・

裏方語り…と立ち止まりておる所に（へ）（和尚出）

唄…　ちょいと今出る　葛西領土の　ひのざき（日野崎）小村（こむら）あの　てらすく天皇（テラスクテンの）気まぐれ和尚さんが　雨降り上がりに　修行と出かけて　修行は良けれども　こて（小手）や　きゃはん（脚絆）は　菰もをかけ（掛け）したてて（仕立てて）右の手には　数珠（じゅず）を持ち左の肩には　大きな木魚（もくぎょ）を　横ちょにかかえて　飲むから足りねぇ　トラヤーヤー　ぶつから　裸（はだか）だ　トラヤーヤー　おや　向うの姉（あね）さん　これものだと　何のかのとて　御念仏は良けれども　はるか向うの　こ（小）袖の　そそらねに十七　島田を　ちょろりと　見そめて　ありょ　見ちゃこてられねぇ　こてられれねの　どやみだよ

何事置いても呼ばずばなるまい　はい
これこれ姉（あね）さん
和尚…　ぷはぁはぁ　この和尚も　雨降り上り
を幸いに　ぶらーり　しゃらりと　出
かけて来たら　なぜか　このようなデ
デ　でっかばちの原中（はらなか）で
あの様な　めめ美しい姉さんにお目に
ぶらさがるとは　ふ（不）徳（とく）
の　三年忌豊年（ほうねん）から　万
作の方へ　ずずらずー～っとおっぺっ
た様な気持ちがした　あの様な　めめ
美しい姉（あね）さんを見ては呼ばず
ばなるまい　どうりゃどうりゃ呼んで
みましょう
やほぉーい　ぷはぁはぁ～　ちゃ
ほぉーい　ぷはぁはぁ
あの代物（しろもの）は　やほいや
ちゃほいで　い（動）ごく　代物では
ねェ　この和尚のありがたき経文の
一巻（いちかん）も読んでなびかせよ
うか・・・。
ガーンガーン　南無おしゃりこ　く
しゃりこ　と　てっぽうこうこう
あーぶく立った煮立った　今日は三ヶ
目で　ちんぼの皮　すりむいた　すり
むいた　へェ　来そうなもんだ　へェ
来そうなもんだ　ぷはぁ　はぁ　姉（あ
ね）さんへ　お前は　どれからどれへ
の　ご通行の　ものでござんすや？
女…　これ申し　和尚さん　私は　葛西領
宇都宮ざい（在）から　銚子のお観音
様へ　参詣（さんけい）に参る者でご
さんすが　道が知れませんので　和尚
さんをお見かけにお頼みでござんす
和尚…　エッヘン　この和尚を見かけに道を聞
こうと言うのかぇ？
女…　いかにも　さようでござんす。
和尚…　エッヘン　お前は　この和尚を知るま
いが　葛西領でも　名も高き　しのだ
き小村あの　てらすく（寺すくテンノ）
気まぐれ　和尚とは　はばかりながら
この　どうしんぼう（道心坊）の事
そして行（ゆ）くさきの事ならば　か
ら（唐）　天じゅく（竺）　日本（にっ
ぽん）は　申すに及ばず　それ　その
ぐっしゃりこの方から　よべぇ　道か
ら　せっちん道　何んでもかんでも
知っている和尚でござんす　そして道
のりの事ならば
女…　およそ　十八九里
和尚…　エッヘン　この和尚は　まだ　十八九里
のかちぐりなんぞ　食べた　和尚じゃ
ござんせぬ。
女…　そんなら和尚さん　八卦（はっけ）を
ご存（ぞん）じですか？
和尚…　なんだぇ　この女みせ　熱いの　はっ
こいのと　気味の悪い事ばっかり　お
前は　この和尚を見ると　はっこくな
るか？
女…　この和尚は　生でも小好（こず）きの
方だから　そらお前の様な　めめ美し
い姉さんを見ると　熱くなる　それそ
のはっこいのと　この和尚の熱いのと
くるくるっと　しっかき回して　この
和尚の　生温かい所でどんでごんす？
和尚さん　それとは違います　占い
八卦の八卦でござんす
和尚…　何んだい　この女みせ　占い八卦の
八卦なら　何故そう早く　おっしゃら
ない　どりゃどりゃ見てあげましょう
当年　お歳（とし）は？
女…　はずかしながら　十七才

和尚…　うん　このみだどに　しめ頃しめ頃
どりゃどりゃ　見てあげましょう
ガーンガーン　南無十七才に見える
女　この和尚になびきたまい　清めたまい　六根清浄六根清浄　小僧や小僧
門前通らば　アジ　なきゃサバでも
芝えびなら　一升五合ばかり　塩からからっと煮つめ　門前さきの　ババァ
に食らわせ　痩せつきを　肥いらかせ
小僧は　けつしろ　そして　おいら
後（あと）で　いい事をする。いい事をする。　そしてこの和尚の八卦は
つばきざんと言って良く当たる八卦
どりゃどりゃ見てあげましょう　おや
シャンシャンシャン　オッシャカシャ
ンのシャン　姉（あね）さんへ　こう
わかりました

女…　和尚さん　どうわかりました？

和尚…　この様な　デ　デ　でっかばちの腹中
（はらなか）で　つばが元気良く　両方
に　パッと開いたから　大方（おおかた）　一丁行っちゃあ　一丁帰（けえ）
り　二丁行っちゃあ　二丁帰（けえ）
り　あっち行ったり　こっち行ったり
しているうちに　はるか向うから　お
人が来る　あのお人に『銚子の観音様
へ参りますには　どどどう行きます
べ』って　聞けばわかります

女…　和尚さん　おほ（お）きに　ありがと
うござんした
和尚さんのおかげで　おほきに　ひま
を取り　銚子の　お観音様に　参詣に
参るに　遅くなりては悪い　ご縁ござ
りましょうなら　重ねてお目にかかり
ましょう　こんにちは　おさらばでご
ざんす

和尚…　おっと姉（あね）さん　待たっせ待たっ
せ　何んだいこの女みせ　知りもし
ねェ　和尚を　とっつら巻（ま）いて
ガッシャクシャ　を　まじなわせ　つ
ばをおっぱたかせ　その御礼も無く
こんにちはおさらばでござんす　とは
ふとどきせんばん　碁盤（ごばん）将
棋盤（しょうぎばん）印ろう　きん
ちゃく　チャチャもっちゃくちゃ　と
言う女だな

女…　そんなら　和尚さん　おあし（御足）
でもござんすか？

和尚…　エッヘン、おあし（御足）とおっしゃ
れば　色は黒とも　こちらに　一本
こちらにも　一本　ご用とおっしゃれ
ば　中にちょこりんと　一本

女…　そんなら　和尚さん　絹類（きぬるい）
でもござんすか？

和尚…　エッヘン　この和尚は　まだ出世前（め
え）だによって　絹類なんぞ　着られ
る　和尚じゃござんせぬ

女…　そんなら和尚さん　何でござんす？

和尚…　何んでもない　そのものよ

女…　おや　ものでは　わかりません

和尚…　ものでで　わかるまい　この位ばかりの
ビロードのきんちゃく
持ちませぬ

女…　おのの　小町だな

和尚…　わかりません

女…　それで　わからなければ　はるか向こ
うに　良き松陰が見える

和尚…　和尚さん　あの松陰で　何とした
わしとそなたは　誰も　見ぬうちに
こうりゃ

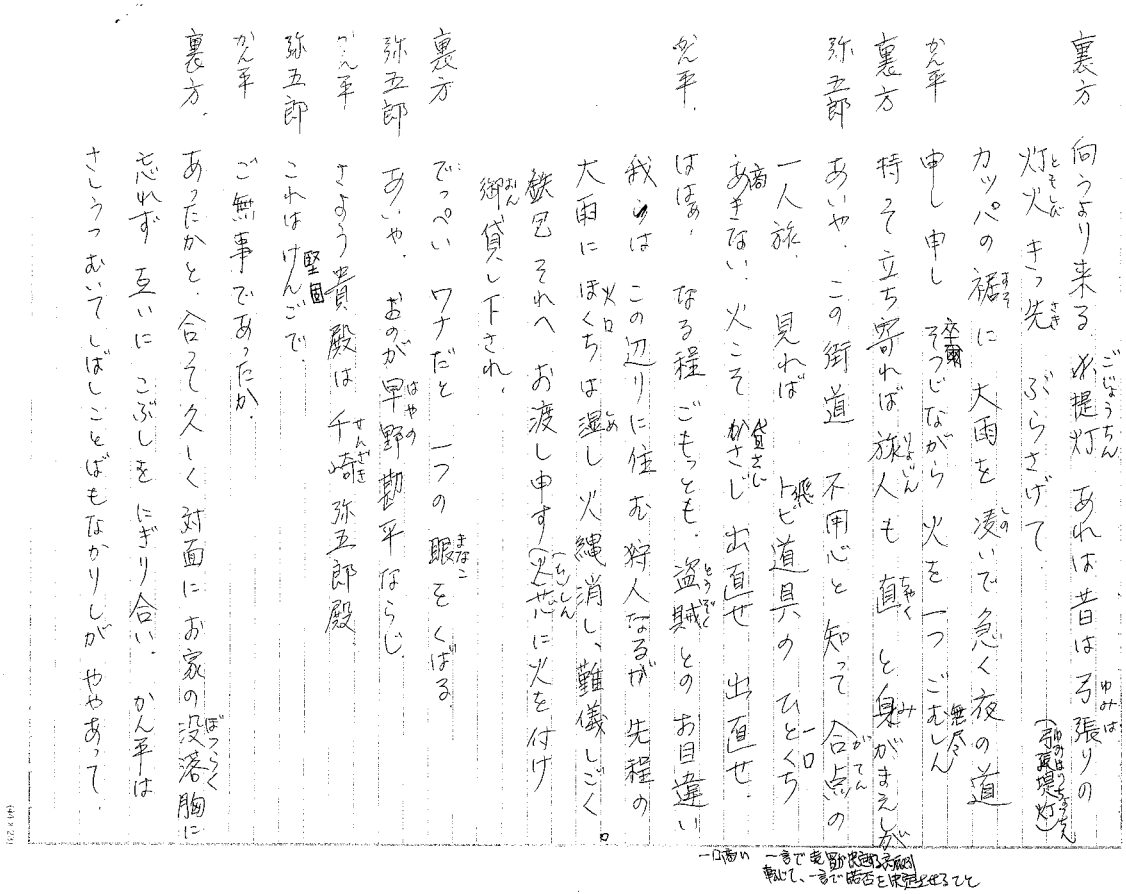
女…　ちょいとしのべば　極楽浄土な　表（おも
て）ご門（もん）を　ぱらりと開い

唄…

て　これこれ姉（おねえ）さん　私の
手引（てびき）では違いねぇの真ん中
だよ　言えば　姉（あね）さん　腹立
ち顔して
これこれ　和尚さん　その様な心では
葛西領土にみなだど（阿弥陀堂）が
立ちますまいぞえ

和尚…
あ　いてて　何ぞと言うと　みだど（阿
弥陀堂）が　立つの　立たぬのと　あ
んな　みだど（阿弥陀堂）は　立った
ら　立たずばいいわ　月にお賽銭と言
えば　一（いち）もんか二（に）もん
おはち米と言えば　一合か二合　悪い
月にはあったり　無かったり　あんな
みだど（阿弥陀堂）は　立ったら立た
ずばいいわ　この和尚は朝から晩（ばん）まで　にょっきらきのように

唄…
立つから　立つから　違げねぇの　真
ん中だよ　いんや　こりゃ　みだどが
立つめぇなぁ・・・あー　さてはよ



No2

かん平　高配（こうばい）のご貴殿に顔を上げられんこの地から（相手の配慮に尊敬を表わすことば）
武士の冥加（みょうが）（神、仏の助け）に尽きたるか。殿判官（はんがん）こう
御（おん）ともさきにお家の大事起（お）りしが　その場にも
あり合わせぬが我が不運　しょせん我が屋敷（やしき）へは
帰られず時折（ときおり）（ときじつ）を待って恩を詫びとう
思いの他（ほか）のご切腹南無参謀（なむさんぼう）　みなもうのおぬが
なす業（わざ）を。刀に手は掛けたれど何か手がらに
御共（おんとも）と心をくだくおりからに。様子密（ひそ）かに
受け賜わらば　由良（ゆら）殿よりごしんし郷右衛門殿を
はじめといたし　事のうっぷんか参戦かため
よりよりのもよおし。我とて今だ　かんどう（勘当）の身と
いうてはなし。くわだて（企て）の連判につなぎ下さらば
弥五郎殿、うどんげの花を咲かせ、侍いの一言。

※　五行目の「時折」は「じせつ」と読んでいる。

裏方　侍いの一言と、かん平は男泣きにと泣きぬれる。
弥五郎も、お家の大事（だいじ）だと明（あ）かさぬず。

弥五郎　さ、かん平お手前は、ぶゆ言い分けと、取りはずし
くわだての連判とは、そりゃ何のたわごとを
それがしは由良殿より、郷右衛門殿へと
急の使い先（せん）んのご病死、御石塔（おんせきとう）と後の世まで
も人の口（くち）はにかからんため。かん平、合点かな。

かん平　ははあ弥五郎殿かたぢけなや。軽が親、与市兵衛
と申するは、百姓なれど　たのもしきもの、

No3

一枚の田地（でんじ）も売り払い、ご用金の用意をととのえ
何卒（なにとぞ）仰（おお）せあらば、この山崎の渡し場を右に入り
百姓与市兵衛と、おたづねあらば早速（さっそく）に知る
べし、行く先はなお物騒（ぶっそう）、必ずぬかるな

弥五郎　合点合点　石碑（せきひ）成就（じょうじゅ）するまでは蚤（のみ）にも食わせん
せんこの身体（からだ）。これも堅固（けんご）で。

かん平　弥五郎殿。

弥五郎　ご用金の便り待つでかん平さらば

かん平　おさらば。

裏方　さらばさらばと、両方に立ち別れてぞ急ぎゆく。

（二つ玉の場にうつる。）

（日蓮経の唄が入る。……昭和五十年のテープより）（別紙有り）

（出し）観音堂おおおおお　おおおー　そりゃ、れーへんれーへんれーへん
れんがれーへんへ、なんだこりゃ、れんがれーへんへ。（へえーえ）
こりゃ、れーへんれーへん、よおおおえー

（ながし）あーあ、ありゃありがたやの仏人も光を照らす世の
中に、日本広めたる、宗門（しゅうもん）の、こそはよ、
日蓮大菩薩（にちれんだいぼさつ）、あーそんれは、拝（おが）めや
なんな、ならなんよーお、えんやら、あんみょう
おおおーこりゃ、れーへん、れりへんん、れんがれーへんへ
なんだこりゃれんがれーへんへ、
ええ、こりゃ、れーへんれーへん　よおおおえー

（ながし）あー、せじょはよ、さいどの、そがために、この世に、

No.4

諸人

こそがよ・現われて・数多の商人を助けんとご誕生
おやトコトントン なされて あんにょらーい。
詳く訪ねて たてまつる。
あー どっこいこら・拝めや なんな ならなんよお
えんやら・あんみょう おおおー こりゃれーへん れーへんへん
れんがれーへんへ・なんだこりゃ れんがれーへんへ、へええこりゃ
れーへん・れーへんよおおおえー

（なかし）あー頃はよ・天をのねんちゅうに（にんのう）八十と五代
に・国はよ いづくと たづぬれば・国は あわ 安房 安房
あんわの国なるが ながさの こうりに かくれなき、

裏方・又も降り来る雨のあし 身の置き所は白波や
この街道は・夜働きする・一すじ道の後より
斧九太夫が 倅 斧定九郎

定久郎 おーい おーい おやじ殿
さいぜんより・おーい おーいと 呼ばわる声
そなさんの耳にはイヤサ、入らぬかー
これ程物騒なる・街道を 万作唄の一人旅とは
そりゃ・大胆 大胆 どうりゃ連れになりましょう。

与市兵衛 なる程 なる程 おめえ様のおっしゃる通り
この後の方で・イヤホイだの チャホイだのと、
いたする声は いたしましたが・大方村の若い衆様
方が・この様なデデデッカバチなシシでも出て
猪
（いのしし）

No.5

大ごとかと思いましたら シシではのうて その様な…
血気盛りのお侍い様 お侍い様で・ご苦労せんばん
このじんじもご苦労せんばん・何をかくしましょう・
今どきはやる・おやふかな。チョーチョ 静かにさし込め
さし込め・芋の葉に吹かれば 野にし…

定久郎 こおら、おやじ！今どき はやる おやふかな。
チョーチョ 静かにさし込め さし込め 芋の葉で
ふかるか 野にしの唄を ここまで 聞きにこやしねえ
そなさんの ふところには・紙数に積もれば おおそ
四、五十枚 ととのえて あるとの事、それを借りに
来たのだ 貸してもらおー

与市兵衛、なる程、なる程、おめえ様のおっしゃる通り
この後の宿で・買う事は買いましたが、チ、チ、チリ紙の
二、三帖 ひっ買って 懐に ポコポンと入れ 背中に
しょったは、あわのにぎりめし・娘が かく乱せぬようにと
ワッチュウ散には・ハンゴン丹 それより他には 何も
ごぜーませんでごぜーます・ごぜーませんでごぜーます。

定久郎 この定さんが、この後の宿で 黒い眼でにらんだ仕事
それを借りに来たのだ 貸してもらおう

与市兵衛 そんなものは・ごぜーませんでごぜーます
ごぜーませんでごぜーます。

定久郎 そんなら おやじ 金は なかろうな・

No.6

ござーませんでござーます。ござーませんでござーます　おやじ先に、

定久郎、どうりゃ連れになりましょう

与市兵衛、お侍い様先に、

定久郎、おやじ先に、

与市兵衛、お侍い様先に、

定久郎　そんなら先に、

裏方、けらくもなくさき急めるが浪人（ろうじん）

定久郎、あーいてててて！！

与市兵衛、お侍い様どうなさいました。

定久郎、持病のシャクが起こったゆえワッチュウ剤（ワッチョウ剤）にハンゴン丹（反魂丹）でもらいたい！

与市兵衛、そのワッチュウ剤（？散）（蟲）にハンゴン丹もございまするとと思いましたが、この後の宿でチョッと取り落として（富山の薬売りか金包ん（包めた））しめえまして　そんなものは、ござーませんでござーます。ござーませんでござーます（せんび）

定久郎　何を隠そう（かく）腹が減って起こったシャク　そのあわの（粟）にぎりめし（握り飯）をもらいたい

与市兵衛、そのあわの（粟）にぎりめし（握り飯）も、ござーまするとと思いましたら、チュ　チュ中食（ちゅうじき）にかっくらそしめえまして　そんなものはござーませんでござーません。ござーませんでござーません（せんで）

定久郎、こおら、おやじ、人がだまっておらば、どこほおすなく（ず）つるしゃあがる。やいばのはをくにせにゃあならぬ。えいっ！

与市兵衛、なら程なら程、おめえ様のおっしゃる通りござーまするは事はござーますが、国にはかわいい娘やむこ

No.7

むこと言うのは元は武士、今は浪人いたする者、（そのむこ）を侍いにせおーせおーと、一枚の田地も売り払い、ようよう四、五十枚、ととのえたる金、今ここでおめえ様に取られたなら、かわいい娘やむこの笑い顔も見る事もできず、どうかそれまでお貸し下されお侍い様

定久郎　ぐずぐず言わずとくたばれおいぼれ。えい！

あーはは…久しぶりのやまぶき色、じんじの懐（じんじの懐）よりこの定さんの懐へお引越しじゃわい、どうりゃ島原さして急ごうか—

裏方、いっさんにかけ狂うシシ（猪）は一文字、木の根、カヤの根ふみたてけたて、あわやと見送る、定久郎、あばらより背中へかけたかん平の二つ玉　パンパン

裏方　シシ（猪）打ち止めしとかん平は、鉄包ひっ下げここかしこ—

かん平、ややしまったりシシ（猪）ではあらいてろじん（路人）の人、申し旅人殿

申し旅人殿、この山崎の渡し場へは、どうどう参りますか

申し旅人殿、辺りに、水はなきか

裏方　水はなし。

かん平、薬はなきか（無）

裏方　薬はなきか（無）と、胞き起こし懐中さぐれば（探せ）しまのさいふ（縞の財布）に五十両

かん平、申し旅人殿、この金我にしばし（暫）の間お貸し下され

天より我に伝わる金（頂きささげて）

裏方、頂きささげて勘平は、シシより先にどくがんをとくに走りゆく。

（昭和四十七、四十八、五十年テープ三本、六十二年ビデオ一本より作成）池田

島原ー京都下京区遊郭

## 4　小黒万作

**台本**

**（1）『手踊りの部　万作歌踊控　小黒樂友会』**

**蝶々蜻蛉の歌と踊り**

蝶々とんぼ、や、きりぎりす、さの御山で、
（お山で）、さえずるのは、松虫鈴虫、くつは虫。
あの子良い子じや、粋な子じや、十か十一で、
鎌で刈切様な、毛が生えた

二曲

追記

前記二曲共歌と手踊で演じ大体演出時間二分間尚此の踊りは万作踊りの基礎となりますので目の向手の所作　足元の具合等ハ軽視出来ない第一歩である

**伊勢音頭**　一曲三分位

伊勢はーなー　津で持つー
津は伊勢、持つつ（よ）ヨイトサー
サヨホホイ尾張名古屋は　ヤンノデ城で持つよ
コリヤ〳〵　ヤートコセーエ
ヨイヤ〳〵　リヤンリヤ
コレハノセー　サノヤレコノセ
伊セ音頭を中心した歌は数多く女性的の歌で有る

**伊勢音頭地余り**　歌と踊り一曲三分位

アアー可愛い彼の娘に添たさまゝに
淡島様に願掛けて
三七　二十一日の断食までもして見たが
御利益無ければ是非もない　俺もサヨホーイ
男妙利がヤンデ盡きたのな
コリヤ〳〵　ヤートコセーヨイヤナー
リヤン〳〵　コレハセーサノヤレコノセー

**伊勢音頭地余り**　弥二さん毘太さん東海道中大井川出水、川止、島田、金屋宿場
島田アーヨー金屋のはたご屋の娘が
上りや下りの道者を見かけて、馳け出した
新さん権さん、肌黒さん　浅黄のもゝ引、ひざ抜けさん、御泊りなれば泊らんせ
お風呂もどん〳〵わいてます
昨日たゝみの表替、ついでに行燈障子も張替えた昨日おかゝの貰たて
御酒の相手が入るなれば新造かむろに中年増
日の出の良い娘も御座います
あれや、これやで　袖やたもとを引止める
コリヤ〳〵ヤートコセーヨイヤナー
リヤン〳〵コレハノセーサノヤレコノセー
外、浮島踊りは現存者横山儀兵衛氏髙樽増造両氏に依により完全に受継れる、
近江八景を背景とした瀬田の唐橋は惜しくも消滅せり

**新川踊と歌**　一曲六、七分要す

オーサヨホホーイ
あれが新川の、地びきの娘か成程良い娘じや、
彼の娘と添ふには　三年三月も裸になるともとげばらでも背負ませう
うんとこ背負たら、べら棒に重たい
それは又愚かよ、たとえ、火の中水の底までもな、いといは致さぬ
オヤアレハノセーヨーホイノホイ
オーサ　新川のむこに、成り度や
むこに又なるには御家の御商賣
綱をすいたり掛けたり干たり浜綱ようたり、
はまの付け様や、荷綱の締めようや、手綱の加減は誰にも負けまいろ、でも押しませう
やれ　おせそこだ
私も腹の中から船頭さんの子なれば
重かじ　取かじ知ないで如何しましよう
オヤアレワノセーヨーホーノホイ
オーサ新川で哈を掘りやるとも、眞実あの子と添ぬきやならぬぞい
オヤアレワノセーヨーホーホイ
こゝで新川を賞めのは行過だが御一座は御免なさい

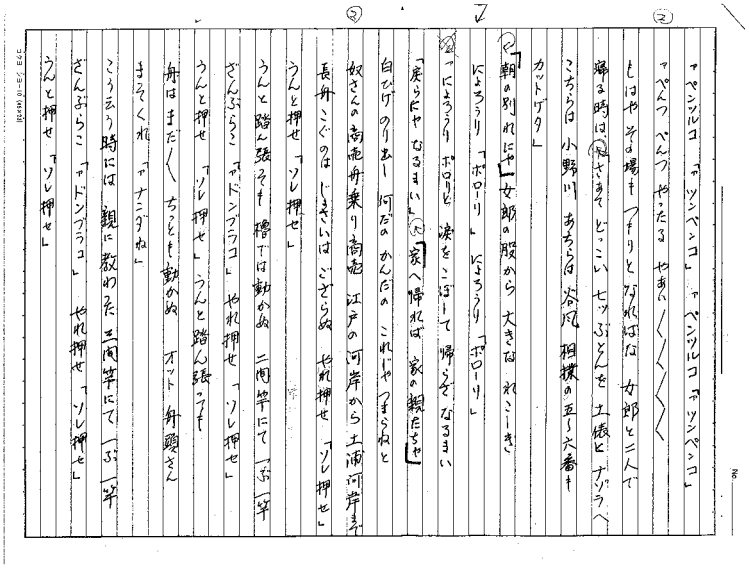
葛西下の町、新川名所で其の名も高いのが当
所では氏神様で角にはお稲荷様で東の権現様
修行して拝みなさい濱に出で見れば利根の大
川上りや下の高瀬や茶船が、あれ又名所する
オヤアレハノセイーヨホホーホイ
オーサ新川芽出度かりける次第なり

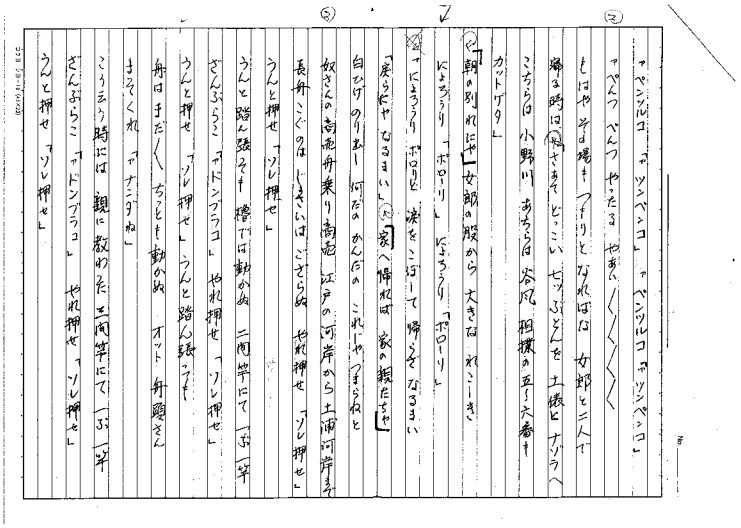
**数へ歌**

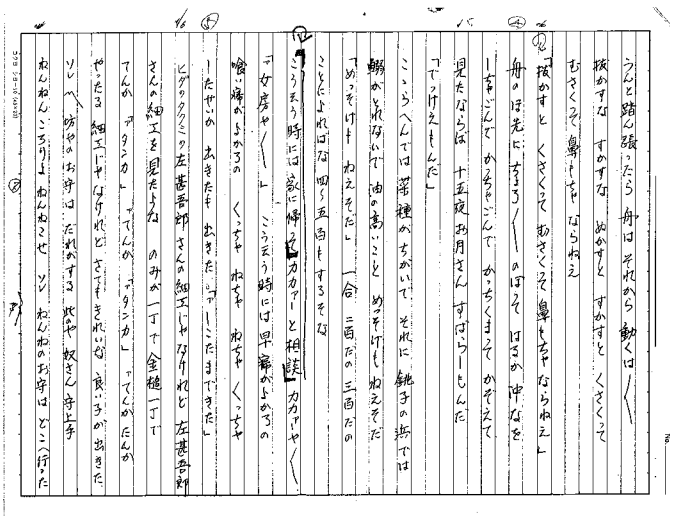
一つとや　一夜明ければ賑やかで
　御かざり立てたり松かざり
二つとや　二葉の松は色良ふで
　三がい松はかずさ山
三つとや　皆さん小供衆樂遊び
　穴石こまどり羽根を突く
四つとや　吉原女郎衆は手まり突く
　手まりの調子も面白や
五つとや　何時も変わらぬ年男
　年も取らずに嫁を取る
六つとや　無理に結んだ玉だすき
　雨風吹けども未た解ぬ
七つとや　何より芽出度孫だきよ
　三かい重ねて祝ませう
八つとや　やはら良い子は千代育ち
　お千代の子じゃもの千代育ち
九つとや　此處に御出よ皆さんよ
　足袋雪駄でちゃり〳〵と
十とや　年神御棚には代の勝栗
　本俵ら　本　俵
十一とや　十一日は倉開き
　御倉開いて祝ませう

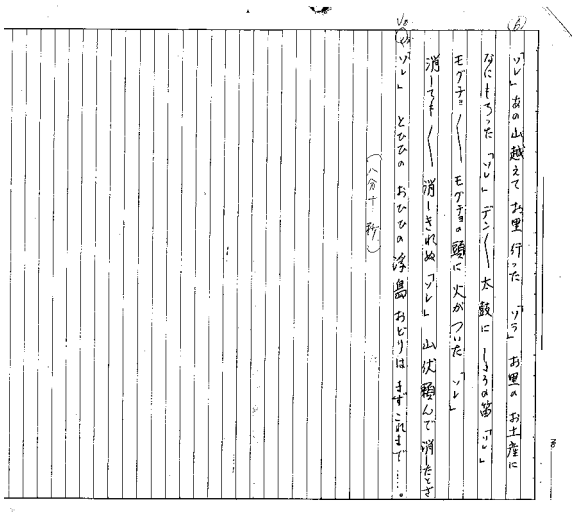
万作歌と踊り
1　白桝粉屋
2　細田勇奴橋渡し
3　三人奴
4　小台寺
5　安珍清姫
6　忠臣蔵五段目
7　お蝶ちょん八
8　義経千本櫻
9　鬼神お松（笠松山）
外

## （2）「浮島」の台本









## 5　栗木の粉屋踊り

### 台本

### （1）『川崎の古民謡』掲載の歌詞

**幕内口上**

拍子木

チョン　チョン　チョン　チョン　チョン

とざいーとーざいー

満場の御客様方、ただ今より、御覧にきよしまする手踊りの数々、幕内より不弁説なる口上な持って、御案内つかまつりまする。

まず最初は、四国は巡礼阿波の鳴門。次は東京葛飾・新川手踊り。三番目に京都は瀬田の唐橋。第四番と致しまして、「かっぽれ」の原形を御覧に入れまするが、この「かっぽれ」は、一番から三番まで御座いまして、一番は御存じ蜜柑船。二番は山の小鳥が木木の小枝で戯れ遊ぶところを演じ、三番は蹙の夫を箱車に乗せ、箱根山を越えるという、夫婦の愛を現わした踊りで御座ります。これが本物の「かっぽれ」で御座りますれば、御高覧のほどを。

さて、最後に御披露いたしまするは、神奈川県広しといえども、当保存会だけが伝承いたしおりまする前半手踊り、後半四ツ竹踊りの白枡粉屋、白枡粉屋踊りに御座りまする。

演じまする者ども、今だ稽古中のことなれば、手を打ち足の踏むところ定かならず。いい損ないやら出っ損ない、しどろもどろうのところは、御客様方なにとぞ御容赦下され、捧腹御笑覧のほどを、会員一同、七重の膝を八重に折り、すみから、すみまでずずずいーと、御願い申し上げたてまつりまする。

拍子木

チョン　チョン　チョン　チョン　チョン

**伊勢音頭**

〽アアー　伊勢はーアーアーナーァァ
　アーアーアー
ハ「ヨイトサー
　つーでーェェエエエもォーつーウゥ
　津はーアアーいーせーェェ
　エエエでもーオーつゥー
ハ「サアノォー　ヨォーイヨイ
　おわーリーイー　サーヨーオー
　なーァごーォォオオやァーはァーア
　ヤァーンーデー
　しろーォでーもーォォつ
　アコリャコリャ　ヤァートォーコォー
　セェーエーエエエエ
　ヨォーオイーヤー　ナーハハン
　アリャリャン　オヤ　コレワイイサアノ
　コーノーヤーレサンノーセイーイイエー
ハ　アゴーキトダ　ゴーキトダー
　ヤーテークレー
〽アアー　前えーのーオーオーナーァァ
　アーアーアー
ハ「ヨイトサー
　かァーどーォォオオオよォーリーイー
　このォーざーをーオーオーさしーイイてー
ハ「サアノォー　ヨォーイヨイ
　七福神が　舞い込んで
　ぐる輪に並んで　お酒盛り
　布袋に福禄　毘沙門よ
　それに続いて　寿老人コリャ
　弁天様の　お酌にて
　飲めや大黒　ほせ恵比寿
　中でーェェエーエーナー
　アアアーアーアー
ハ「ヨイトサー
　つゥーるゥーウウウウかァーめーエーエ
　ヤァーンーデー
　まいーイあそォーオオぶー
　アコリャコリャ　ヤァートォーコォー
　セェーエーエエエエ
　ヨォーオイーヤー　ナーハハン
　アリャリャン　オヤ　コレワイイサアノ
　コーノーヤーレサンノー
　セイーイイエー
ハ「アマーダマル　マーダアル
　「ヤーテークレー
〽アアー　可愛いイイイイイナーァァ
　アーアーアー
ハ「ヨイトサー
　おオとーォォオオこオーとォーオー
　そいイイーたーアさァーアーアーアー
　まーまーアアアにー
ハ「サアノォー　ヨォーイヨイ
　白山様へと願をかけ
　茶断ち　塩断ち　穀までもコリャ
　三七　二十一日の
　断食までも　したなれどコリャ
　それでも添えない縁なれば
　神イーもーオーオーナー
　アアアーアーアー
ハ「ヨイトサー
　ほーとーォォオオオーけェーもォーオーオ
　ヤァーンーデー
　あるーもーのーォォオオーかー

アコリャコリヤ　ヤァートォーコォー
セェーエーエエエエ
ヨォーオイーヤー　ナーハハン
アリャリャン　オヤ　コレワイイサアノ
コーノーヤーレサンノー
セイーイイエー

**伊勢音頭　番外**

**瀬田の唐橋**

〽アアー　瀬田のナ
唐橋や唐金の擬宝珠
ハ［サアノォー　ヨォーイヨイ
おや　欄干襷に敷き板桧
あちらに見ゆるは百足山
こちらに見ゆるは石山寺
おっと　向こうに見ゆるは
六万石の本田様
お屋敷やお江戸の八丁堀
水に映るは
ヤァーンーデー
膳所の城

**阿波の鳴門**

〽アアー　阿波のナ
鳴門の十郎兵衛の娘
ハ［サアノォー　ヨォーイヨイ
年は十にて名はおつる
背中に笈摺り前袋
菅の小笠を手に持ちて
紫竹の竹に身をやつし
巡礼報謝と
ヤァーンーデー
門に立つ

**甚勝五郎**

〽アアー　甚ナ
勝五郎車に乗せて
ハ［サアノォーヨォーイヨイ
花　これ　もうし勝五郎さん
　ここら辺りは山峡の
初　紅葉も散らぬに雪が降り
　さぞや　難儀で御座んしょう
郎　なんの　われは車の中のことなれば
五　難儀なことはなし
勝　引きくれるそなたが　さぞ難儀であろう
花　あれまあ　勝五郎さんとしたことが
　三千世界は広けれど
　女房に向かって世辞いう人が
初　まあ　御座んしょうかいな
　引けよ初花
ヤァーンーデー
箱根山

**お婆**

〽アアー　お婆ナ
どけいきゃる三升樽下げて
ハ［サアノォー　ヨォーイヨイ
背中にしょったる風呂敷にゃ
お米が二升に鰹節
嫁の在所へ
ヤァーンーデー
孫抱きに

**かっぽれ**

**蜜柑船**

フ　かっぽれ　かっぽれ
リ　甘茶でかっぽれ
セ　塩茶でかっぽれ
　ここらでよ　いっとうな
アヨイヨイー
〽おきーイーのーォオオオオー
くらーアいイ　のォーにイイイイイ
しらーァァアハアー　ほーがァーアョ
セエーエー　エエエエエー　みゆーる
ハ［アラ　ヨイト　コォラサ
あれはーきィーのォーオーくーにィーイ
ヤレコノ　オッコレワイノサー

アヨイト　サッサッサー
みかーァァーアアア　アんーぶねだァ
セーエエーエーエー
ハ［サテー　みかんぶーゥね
みかんぶゥーねーエだ
セエーエー　エエエエエー
ヨオーイサ
ハ［アラ　ヨイト　コォラサ
あれはーきィーのォーオーくーにィーイ
ヤレコノ　オッコレワイノサー
アヨイト　サッサッサー
みかーァァーアアア　アんーぶねだァ
セーエエーエーエー

**山雀**

フ　かっぽれ　かっぽれ
リ　渋茶でかっぽれ
セ　乳母も　禿も
　みんな出て　かっぽれ込め
　ここらでよ　いっとうな
アヨイヨイー
〽やまーアーをーォォオオオー
とおーオォオオオれェーばーァァアアア
やまーァァアアア　がアーらーアァョ
セエーエー　エエエエエー　とりーが

ハ［　アラ　ヨイト　コォラサ
えごのォーこォーえーエーだァーア
でーェ　ヤレコノ　オッコレワイノサー
アヨイト　サッサッサー
もどーォォオオオ　オリョーきるだ
セーエエーエーエー
ハ［サテー　もどーりョきーる
もどりョオ　きーるーウウだ
セエーエー　エエエエエー
ヨオーイサ
ハ［アラ　ヨイト　コォラサ
えごのォーこォーえーエーだァーア
でーェ
ヤレコノ　オッコレワイノサー
アヨイト　サッサッサー
もどーォォオオオ　オリョーきるだ
セーエエーエーエー

**鹿勝五郎**

フ　かっぽれ　かっぽれ
リ　苦茶でかっぽれ
セ　新造　年増も
　のために　かっぽれ込め
　ここらでよ　いっとうな
アヨイヨイー

〽いざーアーリーィィイイイー
かつーゥゥウウウごォーろーォォオオオ
くるーゥゥウウウー　まーにーイイョ
セェーエー　エエエエエー　のせーて
ハ［アラ　ヨイト　コォラサ
ひけよーはァーつゥーウーウーはァーな
ヤレコノ　オッコレワイノサ
アヨイト　サッサッサー
はこーォォオオオ　オねーやまだ
セーエエーエーエー
ハ［サテー　はこーねやァーま
はこねェやーまーァァだ
セエーエー　エエエエエー
ヨオーイサ
ハ［アラ　ヨイト　コォラサ
ひけよーはァーつゥーウーウーはァーな
ヤレコノ　オッコレワイノサー
アヨイト　サッサッサー
はこーォォオオオ　オねーやまだ
セーエエーエーエー

**かっぽれ**

〽私のオメコは　六郷の渡し
　早く乗らねと　水が出る
〽娘島田と　あら木の船は

人が見たがる　乗りたがる
〽ろくに毛もない　トウモロコシは
はだけさんすな　まだ早い
〽吉田通れば　二階で招く
しかも格子の　中で呼ぶ

**新川**

〽ああー　おおさーよーおお
あれが新川　地引きの娘か
なぁるほど　良い娘だ
あの娘と添うなら　三年三月も
裸になりても　ばらでも背負いましょ
ハ［おや　うんとこ背負ったらべらぼうに
重たい
それは　また愚かよ
おたとえ火の中　水の底までもナ
いといはいたさぬ
アレワノー　セエーエエエエエエー
ヨーホ　ホーノ　ホイ
〽おおさー
新川のお婿となりたや
婿とまたなるには　お家の御作法は
網をばすいたり　掛けたり干したり
あんば綱よぉたり　あんばの付けよぅや
み縄の締めよぅや　帆の上げ下げ
両帆の張りよぅの
手縄の加減は　どなたにも負けない
櫓をでも　押しましょ
ハ［やぁれー押せ　そぉこだい
おや　私もはらから
船頭さんの子なれば
面舵　取り舵
知らねぇで　どうしよめな
オヤ　アレワノー　セエーエエエエエ
エー　ヨーホ　ホーノ　ホイ
〽おおさー
新川で蛤を掘りゃるともえ
あ眞実　あの娘さんと
添わなきゃなえ　ならぁんぞよ
アレワノー　セエーエエエエエエ
ヨーホ　ホーノ　ホイ
〽ここで葛西を
ほめるのは　いけずきだぁが
どなたも　御免なさい
こりゃ　葛西下今井
新川名所で　お名の高いのは
当所で氏神　香取にお稲荷さん
やれ　熊野の権現さんは
修業して拝みなさい
それ　前と出て見な
あ利根の大川
上りや下りの　高瀬や茶船の
それは　また見えそなる
オヤ　アレワノー　セエーエエエエエエ
エー　ヨーホ　ホーノ　ホイ
ここで新川も　めでたかりける
しだいなり

**段物**

**白枡粉屋**

〈上げ節〉
〽しーイーインらハアハハーハアハハン
ハンハニ　まーハアハハーハアハアハ
ハすヨーオホホイ　オヤ　こオーオーオン
ンなハアハハーハアハ　ハンハンハニ
やーハアハハーハアハハのヨーオ
フーウウフフンフンフニ　めへーへエ
へへーへエへエへーヨーオホホイ
サーヨーホホ―ノホイー
〈お軽と勘平の手踊り〉
〽さいー　ちょいと　そぅだよぇー　今で
て踊るのが　あれが白枡の粉屋の娘か
なるほど良い娘だ　あの娘と添うなら
エー　三年三月も裸でバラも背負います

お水もくみます　手鍋も下げますゥ　三
度に一度は　人の目を忍んでオマンマも
炊きましょ
エーオヤむ　ウーウーウン　すウウフ
フーウウフフンフンフニ　めへーへエへ
へーへエへエへへーヨーオホホイー
サーヨーホホーノホイー
さいーちょいと婿だよェー　婿とまた
なるには承知できなさい　あの　それ粉
屋は一代二代の粉屋じゃ御座らぬ　十代
伝わる粉屋であればナ　お家の御作法は
肩が弱しと　泣き泣きながらも　粉の箱
かついで　西や東をぐるりと回りて
飴でもちょせるように売らずばなるまい
エーオヤむ　ウーウーウン　すウウフ
フーウウフフンフンフニ　めへーへエへ
へーへエへエへへーヨーオ　ホホイー
サーヨー　ホホーノホイー
〈鷲坂伴内と家來が現われる〉
楽屋「アーリャー、リャー、リャー、リャー」
伴内「アーエッサッサ」
家來「アーヤッサッサ」
伴内「アーエッサッサ」
家來「アーヤッサッサ」

伴内「アッ待て」
家來「アッはい」
伴内「アッ待て」
家來「アッはい」
伴内「待て待て、家來ともやい」
家來「なんで、ごんじゃりますやい」
伴内「とかく、戦というやつは」
家來「アッ、なんじゃさ」
伴内「腹が減っては、できぬもの」
家來「アッ、そじゃな」
伴内「そこらに、飯屋があるならば」
家來「アッ、そじゃな」
伴内「飯の五、六升も炊かせろ、がってんか」
家來「はい、かしこまって、ごんじゃりますやい」
伴内「かしこまっちゃ、大変だァ立て」
家來「アッはい」
伴内「アッ立て」
家來「アッはい」
家來「立て立て、家來どもやい」
家來「なんで、ごんじゃりますやい」
伴内「とかく、戦というやつは」
家來「アッ、なんじゃさ」
伴内「しらふなんぞじゃ、いかぬもの」

家來「アッ、そじやな」
伴内「そこらに酒屋があるならば、オット、ごんのじ熱燗で、おれらも飲んだり、貴様らも飲んだり、ともに飲んだり飲ませたり」
家來「もうし、もうし、旦那様」
伴内「アーなんじゃさ」
家來「お酒飲むときゃよけれども、あとで勘定のないときゃ、どうなさる」
伴内「ハテ、こまった」
家來「どうなさる」
伴内「ハテ、こまった」
家來「どうなさる」
伴内「オット、考えた」
家來「なんと考えた」
伴内「あとで勘定のないときにゃ、奥の手だすのじゃなけれども、故郷で覚えし計策の、二本の足で地をけり、尻に帆をかけ逃げるが勝ちだと、エッサッサ」
家來「アーヤッサッサ」
伴内「アーエッサッサ」
家來「アーヤッサッサ」
伴内「アッ待て」
家來「アッはい」

伴内「アッ待て」
家來「アッはい」
伴内「待て待て、家來どもやい」
家來「なんで、ごんじゃりますやい」
伴内「総じて戦の駆け引きは、敵が大敵なりと恐るるな、小敵なりと侮るな、勘平と見たなら家來どもがかかれ、おかぼと見たなら、この方がかかる」
家來「もうし、もうし、旦那様」
伴内「アッ、なんじゃさ」
家來「二分や十粒の給金で、命がまじめにかけらりょか、旦那は御思考しだいにお逃げなさい、家來どもは一足お先に、エッサッサ、ヤッサッサ」
伴内「アッ待て」
家來「アッはい」
伴内「アッ待て」
家來「アッはい」
伴内「待て待て、家來どもやい」
家來「なんで、ごんじゃりますやい」
伴内「そこらに勘平がいるか、いないか見てたもりゃ」
家來「なんだか、見えませぬ」
伴内「アーいたか」
家來「アーいないか」
伴内「アーいたか」
家來「アーいないか」
伴内「アーいたいた、やーやー勘平、汝が主人のニヤーニヤ判官猫定公と、おらが主人の高師鯵様と、なにか殿中の大広間の眞ん中で、アッペチャ」
家來「アックチヤ」
伴内「アッペチヤ」
家來「アックチヤ」
伴内「ペチャ、クチヤ話し合うかと思うたら、汝の主人が短慮ゆえ、腰に差したる小さ刀をちょいと抜いて、ちょいと切りや眞っ赤な血が出た、お痛てて」
家來「あ痛てて」
伴内「お痛てて」
家來「あ痛てて」
伴内「その罪科によって屋敷は閉門、青竹矢來に五寸釘を、ガッチガチ」
家來「もっと打て、ガッチガチ」
伴内「五寸釘を、ガッチガチ」
家來「もっと打て、ガッチガチ」
伴内「そのとき、おかぼに会うたなら、れこを少々落としたが、おかぼ女郎は拾いはせなんだか、そこらにおかぼがいるか、いないかみてたもりゃ」
家來「なんだか、見えませぬ」
伴内「アーいたか」
家來「アーいないか」
伴内「アーいたか」
家來「アーいないか」
伴内「いたいた、やーやー、おかてき」
家來「やーやー、おかてき」
家來「やーやー、おかてき」
家來「やーやー、おかてき」
伴内「そのとき、おかぼこっちに渡さばよしが、なんのかんのと、じくねゃがると、夜具と畳んで布団と投げて、、酷い目に袷帷子・一重物、天竺・木綿や絹呉絽は金巾よりも弱いやつ、アッ、チッ、チッ、チッ、チッ、縮み上がってあやまるか、寒冷紗返答、斜子・斜子」
〈早野勘平が現われる〉
勘平「てもよいところで、鶴のまねする鷺坂伴内」
伴内「アッ、やっぱり勘平」
勘平「おのれ一羽じゃ食い足らねど、勘平の腕の細さや性根深、料理藍梅食うてみ

しようか」

伴内「なにを抜かすか、家來ども討って取れ」

〈勘平と伴内の戦い〉

伴内「伴内さんの家來にゃー、一人も役に立つ者はいねえや、次はおれの番だ、勘平こわいかあー」

勘平「なんの怖くもない」

伴内「そっちが怖くなけれゃー、こっちがこえーやー」

〈勘平が伴内を踏みつける〉

勘平「かくこうなる上からは、目をえぐろうか」

伴内「目をえぐられちゃー、見ることができねえ」

勘平「口をえぐろうかー」

伴内「口をえぐられちゃー、食うことができねえ」

勘平「ああいえばこういう、こういえばああいう、いっそのこと眞二つ」

〈お軽が現われる〉

お軽「殺しゃしやすんな勘平さん、こやつ殺さば、殿へのお詫びのじゃま、まあ堪忍してやったがよいわいなアー」

伴内「おかぼのいうとおり」

勘平「そつことときめこみや、こいつはまた一番、どうやら、こうやら粉になりそうだ」

お軽「おや、またそうだ、私とお前さんと寝るめも寝ないで、こしらえた粉だもの、良い粉ができぬで、どうするものか」

お軽「小僧や小僧、一升枡もってきな」

勘平「へはかるともェ　お小夜さん恋しい　あの娘は良い娘だ　あ真実添わなきゃ　なー　エーらーんぞよ　オヤ　アヤめ　エーエーエンでーエエへ　へーへエへへンへンへた　かーハアハ　ハーハアハアハハーりけーるよー」

（出演者）

歌　高橋加尾留　伴内　飯草公樹
歌　桜井きえ子　家來　飯草武夫
歌　小林トシ　家來　小林正次
鉦　飯草武夫　家來　飯草昭
お軽　鈴木京子　家來　島田政幸
勘平　飯草幸雄

〈粉ひきの所作〉

## 6　長沢飴屋踊り

### 台本

（1）「郷土民俗芸能　あめや踊り」（根岸倫氏より提供）

北下浦文化振興懇話会編

郷土民俗芸能

# あめや踊り

（台本）

笠松峠四郎三郎……1
日運記……8
白松粉屋……13
かきがら……15
高砂……17
伊勢音頭……18


『笠松峠四郎三郎』

（茶屋の段）

侍（旅姿）
はおり
はかま・脚絆
手甲
まんじゅう傘
扇子
わらじ履き

上げ

ヨーイ津軽城下において　オンソーダーヨー

国はこれよりはるかはなれて北にとあたるヨ　津軽と

左手から旅姿の侍出る

南部の城下においてナ　夏目弾上の四郎三郎はナ　殿の御用で御用金飛脚に・金子二百両首にとかけてナ

花の東へお上りなさるヨ

かかる峠は笠松山だよ　笠松山は上りが三里　下りが

傘をかざして舞台を回りながら踊る

三里ヨ　上下あわせて六里の峠に　そのや麓に福島町とて小村がござるヨ　そのや小村に　たすけの茶屋とて　名代の水茶屋三軒ござるヨ　茶屋のその名さこまかに申せば　鶴屋に亀屋に若松屋とてナ　夏目弾正の四郎三郎はナ　なかの亀屋に腰うちかけてナ　お休みなさるヨー

詞

舞台左手から出る

（侍）チョトご免下され茶屋の亭主

舞台右手から中腰でもみ手をしながら出る

（亭）これはこれはお侍様　ようこそあってわが宅へおいで遊ばされました　※（ささこれにと）そこは端近　いざ先ずこれへ

（侍）そうしては居られぬ　今日の日の刻限　最早やなんどきと相成るや亭主

（亭）これはくお侍様・今日の日の刻限　わたくししかとは存じませんが　最早や八ツ半・

七ツ前後にも相なりましょうか、あなた様は何れから何れへ　ご通行あってお上りなさいまするかお侍様
但しこの山ご存知のうてお上りなさいますかお侍様

(侍)　拙者一切不案内でござる

(亭)　この山峠にては　五年このかた女盗賊鬼人お松と申する者　女ながらも七十と余人の手下をつれてすみかをいたし　若い者なら恋路としかけ　年寄り子供には切盗り強盗をはたらき　やーや恐しゅうや　朝の六ツから晩の六ツまでは　人通りはただのいちにんもござりません　わが宅は竹の柱・わらの屋根・すのこの縁・おん見苦しうなれども　今宵一夜お泊りなされて　明あさ早朝にお発ちなされては如何様でござりましょうかお侍様

(侍)　言うてくれるは　旅の親切千万かたじけないが・そのこと聞かずば泊りもしようが　そのこと聞いて泊ったとあらば　国に知れては殿の外見わが身の恥辱いちごうとっても武士は武士　先へ出るともあとへは退けぬ　縁があったらかえりの節に　かさねてお目にかかろうぞや

(亭)　かかりましょう



歌

四郎三郎は歌に合せて踊り

そこで飲む茶は末期の水だよ　払う茶代は六道の賽銭だよ　またぐ敷居が三途の川だよ　言うて侍笠松山へと急がれる　（ヤレそうだよ）急げば間もなく笠松山だよ　笠松山はナ一里一里に名所旧跡立場がござるョ　一里と上れば不動ケ滝だョ　二里と上れば十二ケ薬師ョ　三里頂上には風も通さぬ屏風が岩屋に　鬼人のお松は七十と余人の手下をつれて　朝の六ツから晩の六ツまで　岩のあ

鬼人お松出てくる。

さまに腰うちかけてナ　はるか向うき眺めておればナ

踊りながら

侍姿がかすかに見えるョ　あのや侍旅のつかれか足のとりよが　金につもれば二百両あまりの仕事と見えるョ　あいつだましてあの金盗ろうと　わが身ながらも喜びまするョ　それとも知らずに夏目弾正の四郎三郎はナ　だんだん近より草葉の中より　もうしもうしと呼ばわる声がナ　侍耳にと入りますれば　そこで侍は

侍出てくる

踊る

詞

(侍)　さァーてがてんがいかぬ　笠松山も名所旧跡立場がござる　一里と上れば不動ケ滝・二里と上れば十二ケ薬師・三里頂上にて細い声き出し　もうしもうしと呼ばわる声　女子の声ときこえたが　おのれまへんな者か化生な者かこれにて正体あらわせろ

お松出る 立膝姿勢で荷に向く（女）あァまったく左様な者でも　変化な者でもございません

刀の鯉口を切って（侍）おのれ変化な者でないとは偽り者　この山ふもと中の茶屋にて聞き及んだる　鬼人お松に相違なし．

少しぬく　やさ　これにてひと打ち

お松はおひかえ．（女）おひかえなされて下さりませ　おひかえなされて　恥を申し上げなければその儀はわかりません．私この山ふもと田原町清水川名主武左衛門の娘ハツと申する者　福島町へと嫁こにやられ　縁のないのか姑には憎がられ　つれ添う夫には嫌われ　いる身もなく立つ身もなく　今朝の寝巻のままで　離縁とりいだしたる者でござんす

侍は立って（侍）ほォ　名主武左衛門とな　名主武左衛門とあらば　わが主人五百石ご拝領の知行　この山峠にて女子一人殺したとても　さほど武士の手柄にもならず　言うことあらば　いちいちかたれや女子

女は立膝の姿勢（女）いかにも有難うござんす　この山峠では　雪　霜　風に吹き上げられ　持病の癪にさしこめられ　甚だ難渋臥せおったる者でござんす　あなた様お持ち合せのお薬がござんしたら　一粒いただかせてくださりませ．

コクヨ コヒ－350 (64×44)



腰の扇子を抜き 懐中から薬を出して その女に差し出す（侍）ほォ　薬との無心かな　薬とあらば我幸い　仕込みいたしおいたる伊勢の名宝　浅間ケ滝の万金丹　これさ一粒つかわすによって　ささ両手さいだせや女子

両手を差し出し薬をもらう（女）いかにもありがとうさまでござんす．

歌．

薬をのむふりして草むらにすてる　そこでお松が両手さ差し出し　お薬さいただき　飲むと見せてナ　後さふりむき草葉の中へと投げすてまするョ　そこでお松が

詞

（女）いかにも有難うさまでござんした．あなた様のお持ち合せのお薬で　持病の癪も早速全快いたし．女子の身にとりましては　何のお礼のいたし方もございません　ここは山頂おおかんばた下り三里の音無川までの近道の道案内いたし　これにてお礼といたしましょう

（侍）ホホー　それがしは幼少の砌より武家奉公いたしてきたが　女子の道案内とはこれが初なり　然らば先に立って道案内さいたせや女子

（女）しからばご免下さりませ

歌

コクヨ コヒ－350 (64×44)

踊り乍ら
女が前で武士があと

お松が先立ち　音無川へと急がれる．急げば間もなく音無川だョ　川の岸にて鬼人のお松は小褄をとりてナ　ほろりほろりと涙をこぼすョ　そこで侍

道案内する

詞

(侍) こーら女子　ここまでは難なく道案内をいたしてきたが　何が悲しくほろりほろりと涙をこぼすや女子

(女) わたくし何をかくしましょう水でんかんでござんす

(侍) ほォー水でんかんとな　水でんかんとあらば　昔故人のたとえには　爪の先もぬらすなというたとえがござる　しからばこれにておぶされや女子

(女) いかにもありがとうさまでござんす．女子と申するものは　月に七日の不浄があり　あなた様の大小におそれ身におそれ　もったい至極もござんせん．

大小をぬいて女に渡す

(侍) ほォー若い身そらに行きとどいたやつ．それがしの大小におそれ　身におそれるとあらば　大小は其方にあずけおく　然らば両手をいだせや女子

歌(女)いかにもありがとうさまでござんす．

踊り乍ら
武士が先で
女が大小持って
あとに続く
肩に手をかけて

そこでお松は大小をあずかり　侍背中におぶさりまして　浅瀬の川さば深瀬といつわり　深瀬の川さば浅瀬といつわり　深瀬の川のナまん中ごろにて　持病の癪とてうしろにふんぞり　九寸五分をばおっとり出して



コクヨ コヒ-350 (64×44)

あずかった小刀をぬいて侍の胸に突きさす

侍胸にとずんぶと差し込む　そこで侍

詞

(侍) あーら無念や　口惜しや　鬼人のお松と心得たならこーも無惨にやられはすまい　口惜しや　残念ー．

口惜しやと共にあおむけに倒れる

歌

そこでお松は金も大小もみな取りはらい　そこでお松は

詞

(女) こーら侍　この世は金が仇の世の中だ　金が無ければ助かる命．金がありゃこそ命が終る

歌

おのれの宗旨は日蓮宗旨か　真言宗旨か知らねども　両方合せて南無妙法蓮陀仏ととなえおく　おのれ川下にながれて　とんびからすの餌食になるとも　勝手の方へ失しやーがれ　久しかぶりの二百両　山吹色でありがてェ　人目にかかれば一大事．人目にかからぬそのうちに　岩屋へさして急ごうか

歌

そこでお松は　もとの岩屋へ急がれるョ



コクヨ コヒ-350 (64×44)

# 『日蓮記』

（幕は開いている）

いやそれは・・・ハーなあナ・なんむいやこりやむうみ
よう・・ほ・・ほ・・れいへん　さアれいへんれいへんな
んたらこたれいへん　いやれいへん・・・京さほーえん
ありやありいよーうおーおがたやのー　仏人んのー光り
いさ　よしさてらすァせの中に　一ぺんをー　いいろめべ
るしめんもんほー　これこそー日蓮大菩薩アーなんたらこ
たナハー　ウハハンムー　おがめよいや　こりやむうみよ

（爺さん出てくる（腰をこごめて杖をついて））

ーほー　さアれいへん　いやれいへん・・・ナンタコター
れいへんく　京ーほーへーァ　しじょうヨーヨーホー
さいとうのそのために　あまたのヨーじょ人を助けんと
五反うんは　トコトントン　じょうじなさアれし　御如(おんにょう)
来(らい)ー　くわしくョー　たずーねい奉る
アーなんたらこたサハ・・ンハハ・・いやこりやむうみよ
ーほ・・京ほ・・・ころーはョー　ひとつやとー　た
ずぬうれへばー　にんーの・・・よーハナと五代目に
国はァ　アワアワアワワーハヘン　アワワーの国なるかー
長さのョー　こーりに　かくれなき

詞

人先廻りて尾野久大夫のせがれ定九郎

（仐を半開きで出てくる。舞台中央まで進み仐を全開ー見栄をきる）

（定）さいぜんよりオーイ　オーイと呼ばる声　まだそなた



さん　耳にはいらねーかー　おやじ

（定九郎　刀は一本差し　しりっぱしょり　どんす　素足）

（老）はいりましたとも　はいりましたとも　はいることは
はいりましたが　このあとなるしゅくで　おおかた大
きな猪(しし)でも出て　あちらの方ではオーイ　こちらの方
でもオーイ　オーイと　おゝかと存じましたので　若
い侍さま　ご苦労千万(くろうせんばん)でごぜーます

（定）コーラおやじ　この定さんがこの後なるしゅくで黒い(まなこで)
にらんだる仕事　豊年万作の書付によれば　おゝよそ
四五十枚　金につもれば二三百両　ギリくこっちへ
出しやーがれー

（老）そのようなもナー　もちません　くに　国にかわいゝ
むすめがございまして　旅へ出るにはかくらんせぬよ
うにと作った用意の引わりにぎりめし　米もございま
するが　チョチョ　しずかに

（定）おのれ　チョチョ　しずかや歌よみなぞ　南には
ぬかすと　二尺八寸だてにはさゝぬ　おのが
どてっぱら　エイー

（老）アーア　やられた　やられた　どうぞお納め下さい
南無おどろぼうさん

（定）まだぬかーせん　ソラ傘だ

（老）未だぬかネー　かさでお目出度　このおやじのどてっ
ぱらにはいつもスポンが入りたがるから　入ったか

立ちつ上る

と思ったら　かさでお目出度　お侍様　ご苦労千万で
ございます。　南無妙法蓮華経　〳〵

(定)　コーラおやじ　どうせこうせじやアなるめーが

(老)　なんだヤロー　三しばや　みやしばやの豊年万作のじ
じいだゾ　まだうぬらにまけねエ　ドコロッペン通しや
がれー

(定)　あぶねエわい

(老)　あぶねエためにやるんだ　そっちがあぶねエーきやー
こっちはなおあぶねエワー

(定)　どうせこうせいじやなるめいナー

(老)　なんだ野郎ー　ぬきやかったナ

立廻り　(定九郎刀をぬく　老くまんじゆ今で受ける　三回目に定九郎上役にかまえる　(郎さん切られてひっくりかえる)

(定)　おやじまけたろうーナー

(老)　まけましたとも　まけましたとも　ドコツペン半分ま
けました　どうかおさめておくんなせまし　ナムオドロ
ボーさま

(定)　としより　その様に百に三つぶの涙をこぼして　ねが
わぬことなら　おさめてもやろうが　その書付どこで
わたす。

(老)　わたすことは渡しまするが　クク国にかわいゝむすめ
がありまして　そのむすめにつれそうむこがございま



して　そのむすめや　むこチョンボコナイや　万ボコ
シないを

(定)　年寄りがその様に　百に三つぶの涙をこぼして　ねが
わぬことなら　貸してやろうが　その書付どこで渡す

定九郎刀をおこのる

(老)　まま　ひとつかんがえてきましよ
かんがえました　かんがえました

(侍)　どこで渡す

(老)　つイ　忘れてしめエました　もういちど　かんがえま
した　かんがえました

(定)　どこで渡す

(老)　お前さんが　そのような大きな声で「どこで渡すと」
おっしやいますので　つい忘れてしまいました。
あの野郎　いちばんブル〳〵食わしてやろうか
ブル〳〵　ブー

(侍)　おとっつあん　どこで渡すか

(老)　ハハハハ——　あの野郎ー上から出ればへこたれる
下から出ればつけのぼせる　ブル〳〵ブーと言つたら
おとっちゃんどこで渡すと　ハハハハー
渡すことは渡しまするが　房州は小湊　誕生寺さまの
おもて門で　キゝラキーツとお渡しいたしまする。

(侍)　おやじ　そのことばっごうたぞや
どてのちようちん　吉原がよい〳〵

（旨）どりゃ 吉原とやらへ急ごうか
宏九郎左手へ引込む
（老）やーい 野郎 あの野郎のこねエーうちに あの野郎
の ものまねでもしてみようーか
どてのちょうちん吉原がよい〱 あの野郎のやるこ
たアーこんなもんだ あの野郎の来ねエーうち 天女
へでも
これもだめ べー あの野郎ー天竺老人だか 天女
これもだめ
地でもつんもぐる これもだめ 八十九十になって
メメズやモグラもちの餌食になるのも
これもだめ べー
房州は小湊 誕生寺さま 指していそごうかナー

（歌）

ところはドコダッペンヘン 小湊誕生寺ア― こゝいら
が義理だよ おせんも おまんも 十七島田もみな出てお
がめよ 今の浮世は 法華経でなけりゃ 願いごとかな
わぬ 色事かなわぬ いやこりゃかなわぬ
イヤコラーアムギョー〱 〱レーヘン サーレーヘン
レーヘン イヤコリヤ ムギョー イヤレーヘン ナンタラ
コターレーヘン イヤレーヘン〱 〱 ヘンヘンマ
タレーヘン キヨーホヘー



# 『白松粉屋』

上げ
ヨイシーラーハアハーハマーアハアツーウーフアノーオホ、
・・・ヨンホ・・・ホ サヨーオンホーホヤレコーンホホコ
ンホンホーナーアーアナーアンハ・・・アンハー・・・ヨン
ホホベナーア、ア・・・アンハ・・アンハ・・ナーヤーヤー
ナーエーオヤーヨーホイ
さーちょいと早いのが向うの茶屋から 今出て踊るのがあ
れまた 白松の粉やの娘か なるほどよい娘だ あの娘と
添うなら 水もくみましょ 手鍋もさげましょー 三度に
いちどは 人の目もしのんでおまんまもたきましょヨー

上げ
それ聟になりたや
聟となるなら承知で来なさい 愚かじゃならない このま
た粉屋は一代二代の粉屋じゃござらぬ 先祖の代から私の
代まで 十代伝わる粉屋であればナ お家のご作法は、肩
が弱いか 足が弱いか 泣き泣きすれども 粉の箱かつい
だら 西は七浦 東は九十九里 大東のはなから 飯岡の
はなまで ぐるりとまわりて 粉よしよしかと売らずばな
るまいヨー

上げ

それ　粉の箱がついだら

さーちよいと早いのが粉の箱がついだら、皆様ごろうじろ
東海道はヨー　花のお江戸の日本橋から京都まで　五十と
三次　広しといえども　なかでもとりわけ小夜の中山夜泣
の石のナ　そのまたあたりの小松のこかげや　小杉のあい
だから　十六七八なるうすらげの　ぱらりと生いたあねさ
んたちがナ　上る道者や　下る道者のいやだというのを
むりにとつらまえて　館でもせるように　売らずばなる
まいヨー

そーれ粉をひくともきたやーレソコダ　ソツコソツコ持つ
て来りやなんのこたねェー
ウツタモ　ダイタモ　オナカニアルノモ　チヨロチヨロア
ルクモ　館かい行くのも　お前と私が毎晩ひいたるこだも
の　よいこができねで　ドーナルモノカイ
おやくどうするものかい
「小僧や　小僧や　一升ます持ってこい。」
おやはしかるとも　サーヨンヨー
やれ　あの子は良い子だ　どうでも信実そわなけりやーな
るまいヨー



## 『かきがら』

あーアーれーへーへんみぃーさアーなーヨー　アー
あーアーれーへーへんみぃーさアーなーヨー　アー
なぜかそうだよ　なんでエましょう
ナツミダ　ナツミダ
夏見ーいーのーをんほーだーアーいでよー
そこだよ海を見ればなーヨ　かきがら　かきがら
かきがらほりが　しりをふりますなァーナヨイホヨーホー
オヤおもしれ　おもしれエ
なぜかそうだヨ　なんでエーもしよう
オヤお客のご馳走に　もうひとつやらかせやらかせ
おふりーヤーアンハー　〈
なぜかそうだヨ　なんでエもしよう
沖から沖から　沖からアンハー　汐をほしアー
そこだヨさーすヨー　ナルナーヨイホサー
汐をさあすコリヤ　汐来たならー
ほりたーるコリヤ　かきがらを
南上げしよで　流れるからを
みかごなんぞコリヤ　持って来なさいヨー
みかごなんぞにとりこむには
まんがをコリヤかついでナー

じょれんなんぞをコリヤ　手に持ち
ヤーハレヘレハレヘレ　ステコメドツコイ
ウントコカツイデ　ベラボニオモタイ　ナンタラコトダイ
をやあがり見され　へーみナーアーヨイホヘヨイホヘ
そのあと　そのあと
サー長兵衛と金三郎とおさよどのがコリヤまじりて
昔なじみの色こばなし　たがいちがいに　つつきあつて
やってくるコリヤ　ところを
それをよけてコリヤ　上るべとしたら
とんだところにふみこんでナ
どぶどぶコリヤ　ぬかりこんで　けつまずいてコリヤ
ころんでナ　腰の骨をコリヤ　いためたァーのと
ひざの皮まですりむいてナ　それはまだコリヤ　よけれど
人が見たなら笑うかと思って
かにをとるコリヤ　ふりしてコリヤ
あたりそこいらをなぜまわせばァー
ごんぜおこしにさァーされてナ
泣きっらコリヤ　はちにさされて
かにはきんたまコリヤ　またはさまれて　オーイテテ
いたかんべ　まっかな血が出てオーイテテ
オーイテナ　オーイテナ　オーイテテノタンボサン
あァがり見されェーみーなしーなホイー　ヨーホエー　へ



## 『高砂』

やれソーおうそのだヨー
播州姫路の高砂尾ノ上のじいさまとばあさまが　箒を手に
持ち　熊手をかついで　みかごを背負いてナ　松の枯葉を
さらさらかきよせ　みかごにつめてナ　おたがに背負せて
帰ろうとすればナ　上なる松には鶴の巣ごもり　下なる小
池をのぞいて見ればナ　男亀に女亀がまじめな顔して空を
ながめる　中なる笹には大判小判がナ　なりて乱れる　下
なる梅には小判小つぶがなりてみだれる
高砂尾ノ上のいちの小枝に孔雀の鳥がナ　羽を休める　こ
のや鳥がナ　二度と止まれば　末代長者で暮らすゥだろう
やれソーおうォーそのだヨー　播州姫路の高砂浦にはみ舟
がござるヨ　入船が先祖か出船が先祖か　はるか沖中なが
めて見ればナ　高砂み舟がちらちら見えるヨ　そのヤみ舟
の帆印を見ればナ　打出の小槌を帆印につけてナ　そのヤ
み舟に積んだる荷物は　大判小判やあかだらまじりを下に
と積んでナ　上荷に積んだのは　大さつ小さつを小山の如
くにざんぶと積んでナ　このヤみ舟に乗りたる舟方は　恵
比寿　大黒　布袋　福禄　毘沙門弁天　寿老人がナー　ち
ようど合せて七福人がナ　一堂に揃うて　今年の年は豊年
どしだヨ　浜は大漁で岡濶作じやヨ　弁はいらいで　あり

ヤ箕ではかるヨ　呑めやお恵比寿唄えや大黒　このヤみ舟
に積んだる荷物は　この家へおさまる　ァヤお目出度や

『伊勢音頭』

サーサ　ステコメ　ヤートコセーイエー　ヨーイヤノアラ
リヤン　コレハイッセードーシタ　ヤーレサンノセーエ
伊勢はヨー　津でもつ　津は伊勢でもつナーアラヨイトセ
尾張名古屋はヤンデー　城でもつナー　サッサステコメ
ヤートコセーイエ　ヨーイヤナーアリヤリヤン
コレハイッセードーシタ　ヤーレサンノセーエ
かっぽれ　かっぽれ　あま茶でかっぽれ
あま茶がいやなら　塩茶でかっぽれナート
ヨーイィトナーヨイヨイ
沖のホイ暗いのに　白帆がセーイエ見える
アラヨイトコラセ　あれは紀の国アリヤ　ヤレコノー
コレハイノサ　ヨイトサツサ　サツサ蜜柑船　サテ蜜柑船
蜜柑船だーヨセーイーエー　船がアラヨイトコラセ
あれは紀の国ウーヤレコレコレハイノサ
ヨイトサツサー蜜柑船



## 7　下宮田の飴屋踊り

記録

（1）昭和九（一九三四）年仮設興行届書類一式　（三浦市文化スポーツ課提供）

仮設興行願

一、興行者ノ住所氏名生年月日
神奈川縣三浦郡初聲村下宮田二千八百一番地
初聲村青年團本郷支部
代表者　支部長　石橋藤次
明治十三年一月三日生

一、興行ノ場所及ビ名称
三浦郡初聲村下宮田三千七百三十六番地
若宮神社境内
名称青年手踊

一、興行ノ種類及ビ藝趣　土地青年手踊ニシテ
藝趣脚本筋書等ナシ

一、興行期間及ビ開閉時間　昭和九年九月十八
日午後七時ヨリ午後十一時迄

一、木戸銭　無シ

一、火薬類使用ノ有無　本興行ニ對シ火薬類及
爆発物一切使用セズ

一、目的　一般參詣者慰安ノ為メ

一、藝人鑑札　無シ

右假設興行致シ度候間ノ御許可相成度別紙構造
仕様書及ビ圖面相添へ此段及御願候也

昭和九年九月十四日
三浦郡初聲村青年團本郷支部
代表者　支部長　石橋藤次

三崎警察署長
警部　榎本利作殿

假設興行場設置願

一、住所氏名生年月日　神奈川県三浦郡初聲村
下宮田二千八百一番地
初聲村青年團本郷支部
代表者　支部長　石橋藤次
明治十三年一月三日生

一、興行種別　青年手踊
一、建設ノ場所
三浦郡初聲村下宮田三千七百三十六番地
若宮神社境内
一、構造仕様大要　高サ四尺間口二間奥行二間半
材料建柱丸太其ノ他一寸五分板ヲ使用ス
一、燈火ノ種類　電氣
一、使用ノ期間　昭和九年九月十八日午後七時ヨ
リ十一時迄
右御許可相成度此段及御願候也
昭和九年九月十四日
初聲村青年團
本郷支部長　石橋藤次

三崎警察署長
警部　榎本利作殿

構造仕様書

一、用　材　杉丸太直徑三寸ノモノヲ六尺毎ニ■
テ嚴重ニ縄ニテ結束シ尚麦藁ヲ充分
ニ散ラシタル上ニ莚又ハコモヲ敷ク
一、客　席　設備無シ
一、便　所　便所ハ藝人用ト別■ノ箇所を設置
シ且ツ男女別トシ
客席ニ遠サカリタル場所ニ設ク
一、楽　屋　興行場内ノ裏面ヲ使用ス
一、燈　火　電氣ヲ用ヒ百燭二箇及五十燭ノモ
ノ一個
一、臨官席　警官殿ノ御指揮ニ従ヒ設置ス
右ノ通リ相違無之候也

假設興行場落成届
神奈川縣三浦郡初聲村下宮田二千八百一番地
初聲村青年團本郷支部
代表者　支部長　石橋藤次
明治十三年一月三日生
右者昭和九年九月十四日付出願ノ假設興行場
落成致シ候ニ付使用致シ度候間御認可相成度此
段及御願候也
昭和九年九月　日
初聲村青年團本郷支部長
代表者　■■部長　石橋藤次
三崎警察署長
警部　榎本利作殿

**（2）昭和一一（一九三六）年**

**仮設興行届書類一式（『若宮神社誌』より）**

假設興行願
一、興行者ノ住所氏名生年月日
神奈川縣三浦郡初聲村下宮田
三千三百四十一番地
初聲村青年團本郷支部
代表者　支部長　川名　房
明治三十四年一月五
日生
一、興行ノ場所及ビ名称
三浦郡初聲村下宮田三千七百二十六番地
若宮神社境内
青年芝居
一、興行ノ種類及ビ藝題
土地ノ青年芝居ニシテ藝題及ビ脚本筋

書別紙ノ通リ

一、興行期日及ビ開閉時間
　昭和十一年九月十八日午後七時ヨリ
　午後十一時迄
　但シ雨天ノ際ハ順延
一、木戸銭　ナシ
一、火薬類使用ノ有無
　本興行ニ對シ火薬類及爆發物一切使用セズ
一、目的　一般神社參詣者慰安ノ為メ
一、藝人鑑札ナシ

右假設興行致度候間御許可相成度此段奉願候也

昭和十一年九月　日

三浦郡初聲村下宮田三千三百四十一番地
初聲村青年團本郷支部代表者
支部長　川名　房

三崎警察署長

警部　佐藤政治郎殿

脚本筋書

一、藝台　三番叟
浜ガ大漁デ岡ガ満作ト岡浜ヲ祝フ唄ニ合セテ踊ル
一、藝台　下聰名物平松粉屋
安房ノ國下聰ノ粉屋ノ壻ト娘ガ粉屋商賈ヲシツゝ東海道ヲ夫婦仲ヨク上ル所ヲ唄ニ合セテ踊ル
一、藝台笠松ノ初段
出羽ノ家中夏目彈正四郎三郎ハ殿ノ御用金送付ノ途中津軽ト南部ノ国境笠松山ニテ女賊ノタメニダマシ打ニ合ヒ最后ヲ遂ゲル
一、全　二段
夏目仙太郎ハ僅十六才ニシテ苦心ノ結果父四郎三郎ノ仇鬼神ノオ松ト云フ女賊ヲ見事打取リ仇打ヲナス
一、藝台志賀彈七
奥州仙台ノ百姓與太郎ガ田ノ耕作中折柄通リ合セタ仙台藩ノ指南番志賀彈七ノ袴ノ裾ニ投ケタ田ノ草ガ掛リシタメ無礼打ニ会ヒソノ仇ヲ姉ノ宮城、妹ノ忍ガ由井正雪ノ後見ニ依リ仙台藩家老片倉小十郎ノ骨折ニ依リ見事仇打ヲナス
一、藝台　日連記
房州小港誕生寺ニ与市兵衛老人ガ參詣ノ途中悪奸定九郎ノタメニ日蓮記ノ書類ヲ奪レ様トシタガ漸々ノコトデ無事ニ目的地誕生寺ニ到着參拝セリ

假設興行場設置願

一、住所氏名生年月日
　神奈川縣三浦郡初聲村下宮田
　三千三百四十一番地
　初聲村青年團本郷支部代表者
　支部長　川名　房
　明治三十四年一月五日生
一、興行種別　青年芝居
一、設置場所　三浦郡初聲村下宮田
　三千七百二十六番地
　若宮神社境内
一、構造仕様ノ大要　別紙構造仕様書ノ通リ
一、燈火ノ種類　電燈
一、使用ノ期間　昭和十一年九月十八日午後七時ヨリ同十一時迄
　但シ雨天順延

右御許可相成度此段及御願候也

昭和十一年九月　日

三浦郡初聲村青年團本郷支部長
代表者　川名　房

三崎警察署長

警部　佐藤政治郎殿

構造仕様書

一、構造仕様及用材
　舞台ハ高サ四尺間口二間奥行二間半トシ杉丸太直徑三寸ノモノヲ六尺毎ニ樹

テ三寸角ヲ並列シ其ノ上ニ一寸五分厚ノ板ヲ敷並ベ厳重ニ縄ニテ結束シ筵ヲ敷クモノトス

一、客席設備　ナシ

一、便所　便所ハ藝人用ト一般観客ト別異ノ箇所ヲ設置シ男女別トシ客席ニ遠ザカリタル所ニ設ク

一、楽屋　興行場内ノ裏面ヲ使用ス

一、燈火　電気ヲ用ヒ百燭二箇及ビ五十燭ノモノ一個

一、臨官席　警察官ノ御指揮ニ従ヒ之レガ設置ヲナス

右ノ通リ相違無之候也

（図）

假設興行場落成届

神奈川縣三浦郡初聲村下宮田

三千三百四十一番地

初聲村青年団本郷支部代表者

支部長　川名　房

明治三十四年一月五日生

右者昭和十一年九月　日附願出申候假設興行場落成致シ候間御認可相成度此段奉願候也

昭和十一年九月　日

三浦郡初聲村青年團本郷支部代表者

支部長　川名　房

三崎警察署長

警部　佐藤政治郎殿

假設興行入場人員届

一、住所氏名生年月日

神奈川縣三浦郡初聲村下宮田

三千三百四十一番地

初聲村青年団本郷支部代表者

支部長　川名　房

明治三十四年一月五日生

一、観覧料　無料

右者本日　日附御許可相成候假設興行入場人員左記ノ通リニ有之候間此段及御報告候也

記

大人　　名

小人　　名

計　　名

昭和十一年九月　日

神奈川縣三浦郡初聲村下宮田

三千三百四十一番地

初聲村青年團本郷支部代表者

支部長　川名　房（押印）

三崎警察署長

警部　佐藤政治郎殿

## （3）昭和四（一九二九）年

### 青年手踊施行届（『若宮神社誌』より）

青年手踊施行届

下宮田村社

若宮神社

来ル十八日右神社祭典ニ付餘興トシテ當日午前七時ヨリ午后十一時迄若宮神社境内ニ於テ青年手踊施行（消印二文字）■■

右及御届候也

昭和四年九月十六日

初聲村青年團

本郷支部長石橋藤次印

三崎警察署長上原弥三郎殿

假設興業場入所人員届

一、住所氏名生年月日　神奈川縣三浦郡初聲村下宮田二千八百一番地

初聲村青年團本郷支部

代表者　支部長　石橋藤次

明治十三年一月三日生

一、観覧料　無料

右本月十九日付御許可相成候假設興業場

入所人員左記ノ通リニ有之候■此段御報告候也

左記

大人六百四十名
小人三百五十名
計九百九十名

昭和九年九月二十日

初聲村下宮田本郷支部
代表者　支部長石橋藤次

三崎警察署長
警部榎本利作殿

脚本筋書

一、藝台　三番叟

浜ガ大漁デ岡ガ満作ト岡浜ヲ祝フ唄ニ合セテ踊ル

一、藝台　下総和物平松粉屋

安房ノ國下総ノ粉屋ノ婿ト嫁ガ粉屋商賣ヲシツゝ東海道ヲ夫婦仲ヨク上ル所ヲ唄ニ合セテ踊ル

一、藝台　笠松ノ初段

出羽ノ家中夏目彈正四郎三郎ハ殿ノ御用金送付ノ途中津軽ト南部ノ國境笠松山ニテ女賊ノタメニダマシ打ニ合ヒ最后ヲ遂ゲル

一、仝　　二段

夏目仙太郎ハ僅十六才ニシテ苦心ノ結果父四郎三郎ノ仇鬼神ノ才松ト云フ女賊ヲ見事打取リ仇打ヲナス

一、藝台志賀彈七

奥州仙台ノ百姓與太郎ガ田ノ耕作カ折柄通リ合セタ仙台藩ノ指南眷志賀揮七ノ袴ノ裾ニ（■■）投ケタ田ノ草ガ掛ランタメ無礼打ニ合ヒソノ仇ヲ姉ノ宮城、妹ノ忍ガ由井正雪ノ後見ニ依リ仙台藩家老片倉小十郎ノ骨折ニ依リ見事仇打ヲナス

一、藝台日蓮記

房州小湊誕生寺ニ与市兵衛老人ガ参詣ノ途中悪（漢）奸定九郎ノタメニ日蓮記ノ書類ヲ奪レ様トシタガ漸クノコトデ無事ニ目的地誕生寺ニ到着参拝セリ

## 8　戸川の飴屋踊り

### 歌詞

**（1）飴屋踊り唄（『秦野市史』より掲載）**

〽曇らば曇れよ　箱根山　晴れたとて　花のお江戸は　見えやせぬ
（エコチャうそではないのかと　ちょいと三島　アレワエーノエー　コレワエーノヨッカヨッカ）

〽東京日本橋　亀の子が渡る
親も渡れば　子も渡る
（　くり返し　）

〽おかるは二階で　延鏡
ゆらさんは　灯ろうのあかりで文をよむ
（　くり返し　）

〽北はよいとこ　うしろは山よ
前は野原で　きよらしゅい
（　くり返し　）

〽長い飴屋さんにゃ　誰しもあきる
さまよ　これから　品（しな）変わる
（　くり返し　）

**（2）飴屋踊（『神奈川県民謡緊急調査』より掲載）**

東京日本橋かめのこが渡る
親も渡れば子も渡る

えーこうちゃ　うそではないかと　ちょいと
身にしみる　アレワエエエノエ　コレハエノ
ヨカヨカ（※以下はやし言葉は同じ）
恋の品川女郎しゅうに袖ひかれ
　のりかえお馬の鈴ヶ森
えーこうちゃ　異人さんにだまされ　綱をかぶる
お軽は二階でのべ鏡
　由良さんはとうちの灯りで文を読む
えーこうちゃ　えんの下じゃ　九太夫が文やぶる
曇らば曇れよ箱根山
　晴れたとて花のお江戸は見えやせぬ
えーこうちゃ　うそではないかとちょいと身にしみる

**（3）飴屋節（『秦野市史』より掲載）**

〽曇らば曇れ　箱根山　晴れたとて
　のせかけお馬の鈴が森
ハ今ではないのかと　ちょいと三島
アレワヨーエー　コレワエー　アヨッカヨッカ
〽のぼる箱根の　お関所が　無くなりて
ハ今では　飴屋さんも　通れます
ハ通れたなら　小田原へ　宿をとる
アレワヨーエー　コレワエー
アヨッカヨッカ

## 9　その他の飴屋踊り、万作踊り

### 台本・歌詞

**（1）神奈川県民謡緊急調査掲載の歌詞**

**臼ひき唄（コラサ節）**

川崎市高津区馬絹
アー　ひとつ上げます　キタサー
　臼神さまに　コリヤセー
　あたりさわりがないように
　コラサノセーエエ
アー　あたりさわりが　キタサー
　なにあるものか　コリヤセー
　あたしとあなたの中だもの
　コラサノセーエエ
アー　よくもきなったよ　キタサー
　山坂こえて　コリヤセー
　露やホコリをいとわずに　コラサノセーエエ
アー　連れて　逃げるから　キタサー
　髪結いなおせ　コリヤセー
　島田じゃ　世間が通れない　コリヤセー
アー　臼の廻るように　キタサー
　仕事が廻りや　コリヤセー
　藏も立ちます　七戸前　コリヤセー

**新川（マンサク、アメヤオドリ）**

横浜市緑区川和町
おおさ　しんかわ　じびきのむすめは
なるほど　よいこだ　あの娘と　そうなら
三年三月も　はだかでなりとも　わらでも
しょいましょ　それは　また　おろかだよ
たとえ火のなか　水のそこなりとも　いとい
は　いたさぬ　アレワノ　サーホ　ヨホホノ
ホーイー
おおさ　しんかわ　むことまたなるには　おいえのごしょうばい　あみをば　ひいたり
かけたり　ほしたり　はまずなをといだり
いなばのしめをや　ほのあげさげ　だれにも
まけまじ　ろでも　おしましょう　やれおせ
そこで　わしも　また　はらのなかから　せんどうさんのこなれば　おもかじ
とりかじ　しらんで　どうしょう　ベンナー
アレワノサーホ　ヨホホノ　ホーイ
おおさ　しんかわ　ほめるのは　いきすぎだが　どなたさんも　ごめんなさい　かさいし
ものまちは　しんかわ　めいしょで　おなごのよいとこ　とうしょは　うじがみ　かどに

はおいなりさんよ　あずまのごんげんさま
しゅぎょうしておがみなさい　まえに　ちょ
いとでてみな　たかせゃ　ちゃぶねがアリ
まためいしょする　アレワノサーホ　ヨホホ
ノホーイ　おおさ
しんかわ　めでたがりけり　いだいなり

**万作（豊年節）**

川崎市多摩区菅

お国は播州　ところは　高砂
屋上のみやまに
百と七つのじい様と　ばぁ様が
目籠を背負いて　熊手をかついで
箒は　手にさげ　そのみやまに
松のちり葉を　熊手でかき寄せ
箒ではき寄せ　目籠につめて
背負うとするとき　上を見たれば
一なる　小枝に黄金の実なりて
二なる　小枝に子鶴が　つがいで
三なる　頂上に鶴の巣ごもり
又も　下なる　小池をながめりゃ
雄亀と　雌亀が　波にもたれて
ゆらり　ゆらりと　寿という字を
米に　むすんで　おめでたい

**あめや節（高砂）**

三浦郡葉山町堀内

よいたかさご　やれそうだん　ようほい
ばんしゅうしべちの　たかさご
おのえの松の下には　ぢさまとばさまが
ほおきをてにもち　くまでをかついで
めかごをしょいて　まつのかれはを
はきよせかきよせ　さらりことよせて
おたかにしょわせて　かいろとすれば
したなるこいけを　のぞいてみれば
めがめにおがめが　まじめなかおして
そらをながむる　うえなるまつには
つるのすごもり　おのえのまつは
めでたいまつだよ　おやおほほんめ

**飴屋踊り**

横浜市戸塚区中田町

ヤーレ　そうだよ　ホーイー
くには　これより　ひがしにあたりて　つが
ると　なんぶの　そのくにざかいに　おとに
きこえし　かさまつやまとて　とおげがござ
るよ　そのや　とうげに　五年　このかた
きじんの松が　七十と　五人の　てしたをも
ちてな　すみかをなさるよ　それとはしらず
に　なつめだんじょう　しろさぶろうはよ
どののごようにて　きんすう百両　くびにか
けてな
はなのあずまに　おのぼりなさるよ
かかる　ふもとに　ふくしままちとて　なだ
いの水茶屋　三軒ござるよ　茶屋の　その名
を　いちいち　たたせば　なかやに　つたや
に　かさまつやとてな　三軒ござるよ　なか
のつたやに　おやすみなさるよ

**白枡粉屋（粉屋踊り）**

川崎市多摩区栗木

サーイー　ちょいと　そうだぁ
今　出て　踊るのが　あれが　白枡の粉屋の
娘か　なるほど　よい娘だ　あの娘と添うな
らェー　お水も汲みます　手鍋もさげます
三度に　一度は　人の目を　忍んで　オマン
マも　炊きましょ　サイ　ちょいと婿だよ
婿とまたなるには　承知できなさい
アノ　それ　粉屋は　一代　二代　の粉屋
じゃござらぬ　十代　伝わる　粉屋であれば
な　お家の　御作法に肩が弱しと泣き泣きな
がらも　粉の箱かついだら　西や東を　ぐる
りと回りて　売らずばなるまい
サイー　いよいと　早いのが　粉の箱　ひっ
かついだならばナ　東海道は五十と三次　広

しといえども　中でとりわけ　小夜の中山で
ナ　夜泣き石のナ
そのやあたりに　十六七になる　姉さんたち
がナ　小松のこかげで　前掛け襷で　飴でも
チョせるように　売らずばなるまい

**飴屋踊**

平塚市横内

葛の葉
きみより　ちょうらい
アーあわれなるかや葛の葉
童子丸　抱き起し
アー幼なけれども　よう聞けよ
母はまことの人でない
アー千年過ぎし狐ぞや
保名殿のご病気ゆえ
アー今日は如何なる吉日ぞ
我身にとりては因果ぞえ
昨日までも今日までも
アー右手に童子　左手に夫までも
川という字で寝たものを
アー夫に別れ　子も捨てて
いやなる信田のふる里へ
アー帰らにゃならない義理となり
帰る　この身のは　朝咲いて
アー夜にしおるる　朝顔の
葉の露散るほど　惜しまれどエ
あとに残りし童子丸
乳房にこがれて　泣くであろうエ

**伊勢音頭**

川崎市多摩区栗木

アー　伊勢は　アアアー　アー　アー　アア
ア　ヨイトサ　津うで　ええも　おおつラ
ラー　津は　伊勢でもおおつ　サノーヨー
イヨイ　尾張イ　サァーヨーオ　名古屋ー
アーハーア　ヤーアンデ　城ーで　もおおつ
コリャ　コリャーヤ　アー　トーコセェー
エー　エー　エエエ　ヨォーオー　イイヤ
ナァー　ハハン　アリャリャン　オヤコレワ
イイサアノ　コーノーヤーレ　サーノー　セ
イイエー　前のかどより　この座をさして
七福神が舞い込んで　ぐるわに並んで　お酒
盛り　布袋に福禄　毘沙門よ　それに続いて
寿老人　弁天様のお酌にて　飲めよ大黒　さ
せ恵比寿　中でな　鶴亀　ヤンデ　舞いあそぶ

**伊勢音頭**

逗子市小坪

サー　アアア　エエ　めぜたな　アア　エエ
エ　めぜたェがェ　三ツ重なりてよ　エサー
ヨイトセ　アキタ　庭にゃ　ヨイ鶴亀　ヤン
デサ　五葉　の松よ　サー
ヤート　コセー　ヨイヤナ　アリャリャイ
コレワイセーサ　ヤノサセ
ハーアアア　エエ　今日はな　アアエエエ
嬉しやェ　みなェさま　一座よ
サ　ヨイトセ　アキタ　あすはヨイ　となえ
たと　ヤンデサ　一座や　アラヨ
サーヤー　トコセ　エーヨイヤナー　アリャ
リャイコレワイ　セー　サーヤノ　サノセ
ハーアアア　エエエ　ひなのな　アア　エエ
エ　子どもに　袖なしョ　着せてよ　エサー
ヨイトセ　アキタ　これがョェ　まことのヤ
ンレサ　ちゃんちゃんこよ　サーヤトコセ
ヨイトナ　アリャリャイ　アコレワイセ
サーヤノサーセ

**（2）『神奈川県民俗芸能誌』に掲載の歌詞**

1　白松粉屋（白桝粉屋・平松粉屋）

よい白松、さよう粉屋。おいとこそうだよ、
いま出て踊るのが、アレは白松粉屋の娘か、
なるほど良い子だ、アノ子と添うなら、お水
もくみましょ、手鍋もさげましよ、三度に一
度は、人の目を忍んで、オマンマも焚きましよ、

スリヤ聟になりたいよう、チョイト、聟になるにはおろかぢやなられぬ、アメ屋と粉屋は、一代二代の粉屋ぢやござらぬ、先祖の代から、十代つたわる粉屋でござれば、お家の無作法は、そむいちやならない、肩がよわいと、泣き泣きながらも、粉箱かついで、西の方から東の方へと、グルリと廻らなけやならない。粉箱かついで、よーいとネ。チョイトまた早いぞよ、粉箱かついだら、皆さんごぞんじ、東海道は花のお江戸は、日本橋から、芝や高輪、品川大森、大森細工。大ますたけおが、六郷きげんで、横田にそいだす、ここが神奈川、新町程ヶ谷、戸塚の宿をば、通りこえて、イヤというのに、からみついたが、藤沢宿だよ、四谷街道は粉よし、よしとなア。ここが平塚、大磯小田原、箱根をこえて、原か吉原、蒲原こえて、由比と興津よ。島田に金谷。こういらのご近所に、小夜の中山夜泣石は名所でござれば、その山あたりの小松の木かげや、小杉の間から、十六七になるアネさんたちが、のぼる道者や、くだる道者を、イヤというのに、無理に引ずりこんで、飴で餅をせるように、知らずばなるまい、粉箱かついで、来たヤレ、ソコだ。

男コトバ「ソッコともってきな、よい子ができる」

女コトバ「オヤ〳〵〳〵〳〵、

おまへとわたしと臥る目も臥ないで、引いたる粉（子）だもの、良い子ができいで、どうなるものか」、

男「こうなるものか」、女「どうするものか」

男「こうするものか、小僧や小僧や、一升桝持ってきな」、女「はかるとも、さよう穴だと」。

アノ子はよい子だ、どうでもしんじつ、添はなきやならないヨ、アラよい、アラよい。

## 2　新川（地曳引）

おーさ、新川の地曳引き。よいとこ、この先きは、アレは新川、地引の娘か、なるほど良い子だ、あの子と添うなら、三年三月も、裸になりとも、イバラもしよいましよ。

コトバ「ウントコ背負っても、何でもなかった」。

ソレヤまたおろかよい。たとへ火の中、水の底までも、いといはいたさぬ、アレハセー、聟になりたいよ、聟になるにはお家の商売、網でもすいたり、かけたり、干したり、アバ網よって、アバのすけよと、帆の上げ下げ、みなはのしめよと、手縄のかげんは誰にもまけまい、ろも押しましよ、ヤーレ、押せ押せ、ソーコだ。わたしもハラから船頭の子なれば、おもかぢ、ともかぢ、知らねどしましようね。まきのタボで、はまぐり掘るとも、ホントにしんじつ、添はなきやなるまい。ここでかさいをほめるではないけど、かさい下町新川名所は、青菜のよいとこ、なぜというのに、当所氏神熊野の権現さん、香取お稲荷さんを、信用して拝めよ、前へ出て見れば、利根の大川、上りや下りの、高瀬や茶舟、あまた名所でおめでたい。

## 3　子守

一つ突きたいヤこれはいのよう。人は友ゆえ、二人の仲は、切るに切られぬ仲となる。サアチョイトまた、二つ突きたいヤ、コレハノヨー、明けていわれぬ仲となる、ヤレコラネ、それやそれや、ヤレ〳〵、コレハノヨー。ふすま一重、恋路の関よ、あけていわれぬ仲となる。黒いもので申したら、からすに月蝕、たどんやの手間とり、人形つかい、忠臣蔵の夜討ちに、坊さんころも、しんの暗夜、サノコレヤ、ヨーイトナ。一つとせ、一夜があければ賑やかで、おかざり立てたら、松かざり。二つとせ、ふたまの松は色よいで、三がい松には上総（かずさ）や

ま。ホンニこしやくなガキはない。こないだも祭へいって、大事の話をしていたら、肝心かなめというトコで、このガキが泣きだした。こないだも、角の権兵衛さんと話をしていたら、焼きもちやいたよ、焼きもちやいてもよいから、こんなきれいな、おずしまえ、（尿）シイなどしなさんな、アラいううちの下から、シイなの、キタナイ〳〵。わたしやこんな子の子守は上手だよ。ネンネコしよ、ネンネコしよ、ネンネのお守はどこへいた、あの山こえて、お里いた、お里のお守はどこへいた、デンデコ太鼓に、しようの笛、コンぼうしに風車。ウーサギ、ウサギ、山の中のうさぎは、何見てはねる、十五夜お月さま見てはねる、ほたる、ほたる、ほたる虫はどつちへいてもよいから、自分の泣くのを、チトやめアがれ。婆さん、きいて下さいな、こないだも近所のお祭へいて、大事の人と話をしていたら、肝心かなめというトコで、この子が泣きだした。それはそうと、ところのお若い衆さま方、上総の国へおいでなさったら、チトおよりなさいませ。何も御馳走はございませんが、あのもとに毛の生へた、イノカ（三角貝）の二三ぱい、あげましよ。（おぎやア〳〵と子供が泣く）。そんなに泣くなら、あの母（か）アやのとこへ、乳のみに、何のかのとて帰りかけたれば、スグそばだよ。

4　しんぽ広大寺

今はやる越後評判、広大寺のお和尚さんは、チヨイト出るには、ソコだよ、越後評判、だてをする。おこそ頭巾をかぶって、錦仕立ての袈裟ころも、オーサ、ヤレヤレ、どなたもきかんせ、ヨイキタ、ドツコイショ、トツチリ〳〵チチリツチ。これはすなわち越後の国の、なまぐさ和尚、オヤオヤ、おまえさんは見栄坊なお寺さん、チヨイト出るには、錦仕立ての袈裟ころも、オーサヤ〳〵、どなたも聞きやんせ、よいきた、ドツコイしよ。大きなエヘンもでるればでるもの、出ないときにはさっぱり出ない。してまた、この和尚、お天気のことなれば、何ともなしに、グラリサラリ、出て参じます。してまた、遥か向うに、よい新茶屋ができた、アレは何屋、ドドドウラク屋、あの道楽屋にはここら近辺にはない、物しりとやら、しろものとやらがあるそうだ。和尚はあれへ行って一プクすい、足を休めて、またブラリサラリと出てさんじよ。「チト、お頼み申します、旅の僧でございます」

女「ハイハイ和尚さん、チトおよんなさいまし」（袖をひく）

和「よせというに」

女「してまた和尚さん、今日は何故でござんすか」

和「和尚は今日は一文もないわい」

女「一文もなければ、わたしが立て引きましようわいな」

和「いつもくどいシロモノだな。とは云うものの姐さん、おまへは一体は、二体は、三体のやまいで、どこのいづくの太郎兵衛さんの、お娘はお名前は何と申しますえ」

女「アレ和尚さん、しまったり、わたしの先祖をとうなれば」

和「オーサ、せんべい食ったなら」

女「わがいにしえを名乗れば」

和「オーサ、わが指をしやぶれとやら」

女「そして、和尚さんの国は、どちらでござんすかいな」（肩を叩く）

和「ア、痛ツ、痛ツ」

女「オヤ〳〵和尚さん、どんなされた」

和「どうなさいましたもないものだ、ぶつつけ千万、ゴバン、シヨウギ盤、印籠きんち

やく、チヤチヤむちやく、という女ではないか、この和尚をつかまへて、ステテンコロリンと、ピンとなげおった、その上でアレアア和尚さんとしたことが、とんだ女だわい、いつしたことがあるえ」

和「なるほど、おまへはこの和尚の生国でもききたいのかえ」

女「いかにも左様でございます」

和「この和尚はもったいなくも、国は北陸わたり、越後の国のシンポ広大寺の和尚だわい」

女「アレマア和尚さんは嘘ばかり。おまへはどうやら、下総辺」

和「下総はどのへんと見える」

女「アノ飯高中村、誕生寺のご出家さんと見えますわい」

和「誕生寺の所化という証拠はどこにある」

女「ソノ証拠は」

和「ソレ、あるまいが」

女「第一、あたまには黒のよだれ頭巾をおもちまえ」

和「外聞のわるいことをいう女だな」

女「そして腰には赤い印籠をさげ」

和「おまへはどうやら、横から見ても」

女「タテから見ても」

唄「どうやら、道楽そうな和尚さま」

和「大変だ〳〵、

唄「何が大変だ」

和「ぬけました〳〵」

唄「何がぬけました、腰がぬけました。腰がぬければ明日から斉（トキ）にはゆかれない。今ここへ、十六七になる女子がいて、和尚さん、チトおよんなさいませ、チトおかけなさいませ、云ってるうちに、どこかへ行ってしまうた、和尚はたいがいは、こうだと思った。ここいらに、ウソリ〳〵してると、月夜のかまどをぬかれたような気持がする。和尚はバカ〳〵しいから帰ろう〳〵、待てよ、このまま帰るも残念、いまいちど、ここへ引きいだし、あまた御見物のその中で、チョツばたけて、チョイこんでやりましよ。いまの女中〳〵、和尚はバカ〳〵しいから帰るぞよ〳〵、

女「ハイハイ和尚さん、いまのお市でござんすわい」

## 5　五段目くずし

ふし「身のおきどころ、あと白浪の夜働き、

斧九太夫が伜定九郎」

定九郎　オーイオーイ、さつきから呼ばわる声が耳にはいらぬえか。このような物騒な街道を一人旅とは大胆、大胆。いざまず、連れになろうぜ、父ツさん。

ふし「あとさ廻れば、キヨロ〳〵眼でとっと出ては、さすがは老人」

与市兵衛（出る）

こわい、こわい、なんでもこの親爺の耳に、ハハはいりましたが、このあとの村方でお若い衆が、ゾナーい猪でも出あうたように、アチラの方ではホーイ、又こちらの方ではチヤーイと、お追いなさる声かと思いましたら、みれば血気さかりのお侍さま、お若い方には御苦労千万、わしや連れもなんにもいりません。

「いまどきはやるナア　ヤツコラサ、チョウチョ静かにさしこめ〳〵、芋の葉にでも吹かれようかな」

だまれおやじ、そなさんの懐には金にしてみれば、四・五十両、紙にしてみれば四・五十枚、豊年万作日蓮記の書付があるのを、この定さんが黒い眼でにらんだわい、その書付きり

〳〵此方へ渡してくんねエ、とつさん

与　トトトンでもねエ事をおつしやります、そのようなものをもっておりますものか、ああ成る程〳〵国にかわいい娘が一人ありまして、その娘の名はあのおかる。

定　なんだと。

与　おかるう娘でありまして、それに連れそう聟の名は、あのカーンあのかん、あのかんー

定　なんだと。

与　かんからかんの勘当息子でございまして、その聟と娘が、かくらんせぬようにと、和中散に反魂丹、背中に背負ったはちゆ、ちゆう食のにぎり飯、それより何ももって居りませんお侍さま、オ、なるほど〳〵、このあと村方でちり紙三帖買ってふところに、ポカンといれたほかは何にももって居りません。

定　なければ仕方ねエ、ご一緒にめエりましよ、とつさん先へ。

与　お侍さま先へ。

定　ならばご一緒にめエりましよう。（と連れ立つ）

与　あいたた・・・・

定　どうなさいました、お侍さま。

与　にわかに空腹の虫がおこりました。

定　ハテ困ったことだな。

与　この病気の起こる原因（もと）と云えば、腹の減った故、そなさんのもったチユチユ中食の握り飯、チッともらいてエ。

定　ナニそのようなものを持って居りますものか、オーなるほど〳〵この後の村方でカメ犬にほえられてやってしまって、つゆしかござりません。

与　なけりや仕方ねエ、その和中散とやらを、すこしもらいてエ。

定　ハテ、困ったことを云う野郎だナ、いちいち云いわけを云うようでございますが、和中散、反魂丹とやらは、あとの村方で村雨にあうて、どぎまぎとして、捨ててしまって、つゆしかございません。

与　だまれおやじ、下から出りやアつけ上り、この二尺八寸伊達にやささねエ、われの寝覚めにやなるめエが、おのれの土手っ腹へお見舞申そう。

定　ア、わりやア、どうしてもこの俺を殺す気だナ。

与　とつさんまだぬきやアしねエ。

定　ナナ　なんだと、まだ抜かねエと、このいい年をした者を、上げっぽくららしやがるこのくされ野郎め、お前さんがおぬきなされなければ、お前さんもおめでとうございますし、このおやじもおめでとうございます。

与　それではぬいてお目にかけようか。

定　ピカ〳〵光るものは大きらいの天井、平にお納めくださいまし、南無お泥棒大明神さま。

与　年とってこわくば納めてやろうが、そつちの豊年万作日蓮記の書付け、どこで渡すな。

定　ハイ、その渡すところでございますが、ガラッとぶち忘れてしまいました。考えて来るからまっぴらごめんなせエ。師走の蛙で考える〳〵。あの野郎の顔を見れば見る程おつかねエつらアしてやがる。このとっさん

が昔ばなしの目一つ小僧でおどかしてやるベエ、野郎コツチを見ろ〳〵ウワー、アハー。

定　とっアン、どこで渡すな。

与　アハー、このとっアンが昔ばなしでおどかしてやったら、とつちやんどこで渡すな、とっアンどこで渡すな、このくされ野郎め、ヤイ〳〵このおやじがさっきから、ブル〳〵ふるえていると思っているのかヤイ、このおやじはこの二三日チューチュー中気の加減でふるえているのだ。そこをおつぴれエて通しやがれ〳〵。

定　あぶねエ。

与　あぶねエ為にやるんだ、この与市兵衛おやじは、江戸の宮芝居の与市兵衛おやじたあ、たちが違うんだ、このあめや踊りの与市兵衛おやじは甘えすじは喰わねエ、そこをおつぴれエて通しやがれ。・・・これでよかんベエ、南無妙法蓮華経〳〵。（卜両人たち廻りとなり、定九郎のびる）

与　よう〳〵のことで、この野郎おさめえらかしてしまった。この野郎などなかなかきかねえ野郎だが、このとっさんもなかなかきかねエとっさんだ。このとっさんは昔回向院で三段目までとった、とりあげたとつさまだ。晴天十日、ただの一日も勝ったことのねえとつさまだぞ、どれ四股をふんでみべえ、どっこいしよ〳〵、この腕でこい、誰も見てねえときは、誰でも威張れまさアね、皆さん。またこの野郎生き還ってくるに相違ねえ、ドレ誕生寺様へ急ごうかしら、南無妙ふくれんげきよう〳〵。（卜、定九郎起き上り、立ちまわりとなって、与市兵衛のびる）

定　これじやどうだな。

与　マ、マ負けたような形ですね、皆さん。いち巻渡すか。

定　渡しますうとも〳〵。このところは一と通りおききくださいまし、わたくし何をかくしましよう、国にかわいい聟と娘がありまして、その聟と娘にぶんぶくちやんぶくをおぼえさせたいばつかりに、後生のことはさておいて、諸所方々かけ走り、ようよう認めたこの一巻、いまお前さんにとられてしまうと、その聟と娘にぶんぶくなん、ちやぶくなんやを、覚えさせる事ができません。その節までどうぞお貸しなされて、くださいませ、南無おどろうぼう大明神さま。

与　そのぶんぶくちやんや、ちやんぶくなん覚えさせたそのときは、どこで渡すナ、

定　ハイ。来春は小湊誕生寺さま表御門で、きっとお渡し申します。

与　それでは来春小湊誕生寺さま表御門と、きっと云うたな。

定　ハイ〳〵。

与　その言葉違うなよ。

定　「土手の提灯、吉原通い。アヽ、あの吉原とやらをさして、どりや」（と、定九郎去る）

与　土手の提灯よし原通いーあんなまねは誰でもできまさアねエ皆さん。あゝ、よう〳〵のことで、あの野郎をだまくらかして追っ払ってしまったが、あの野郎また來るに相違なし。どこかよさそうなかくれ場所がない

かな、あゝあるぞエ〳〵この天だテ、この天に羽をはえらしてバタ〳〵と、これもだめのカーラ、あの野郎、天竺浪人だによって、此天に来るに相違なし、まだよいところがありそうなものだ。あるぞエ〳〵、此の中だテ、この中へチューチューとこれもだめのカーラ、あのように中ぶらりんだによって、この中に来るに相違なし、まだよいところがありそうなもの、ホーあるぞエ〳〵この地だテ、この地へ穴でも掘ってもぐってしまへば、あの野郎は来やしめエが、おおかたもぐらや、めゝずがせつちようするであろう。これもだめのカーラ、まだよいところがありそうなものだ、あゝあるぞエ〳〵、はるか向うによき松が見える、あれこそ小湊誕生寺表御門に相違なし、志すところは誕生寺にでも急ごうかな。

**▽飴屋唄・万作唄**

粉屋（一）

チョイト、ソウダヨ　今でも踊るのは、あれヤまた白桝粉屋の娘か。なるほどよい子だ、あの子と添うなら、お水も汲みましよ、三度に一度は人の目もしのんで、おまんまも焚きましようぞや、ホイ。モオーナンーアンガアンアイア。

粉屋（二）

お聟となるなら、西の方から東の方へと、粉よしよしと、せらずばなるまいぞヤホイ。ソーレ、来たやアソコだ。ソコソコきめこめ、何たらことよ。こんだは一番、どうやらこうやら、かかあや、こになりそうだ。オヤオヤオヤ、しょったも抱いたも、おなかにあるのも、天保もたせて、二本棒くつたらかして、飴買いにやるな、おまいとあたしと、宵から朝まで、おんべたべたべ、たべたべたんこべた。すっからかんともちあげて、こしらへた子だもの、良い子でなくて、どうするものか。

伊勢は津でもつ

伊勢は津でもつ。津は伊勢でもつ、尾張名古屋は、域でもつ。（港北区）

数え歌

一は伊勢の大神宮、二は日光の招魂社、三は讃岐の大やしろ、四はまた信濃の善光寺、五つは鵠沼からす森、六つ村々鎮守さん、七つ成田の不動さん、八つやわたの八幡さんよ、九つ高野の弘法さん、十は東京の招魂社。アーこれほど神々心願かけて、二人のやまいをぞくぞくと、なおりん末は、末にや夫婦となるわいな。（藤沢市鵠沼）

かつぽれ

カッポレカッポレ、甘茶でカッポレ、渋茶でカッポレ、沖の暗いのに白帆がみえる。あれは紀ノ国みかん船、蜜柑船よ、みかん船が着いた。豊年ぢや、万作ぢや、明日は旦那の稲刈で、小束にまるめて、ちょっと投げた。（戸塚）

いざり勝五郎

いざり勝五郎車にのせて、引けよ初花、箱根山、箱根山のまん中で、ここらあたりは山がよい、紅葉があるのに雪が降る、さぞ寒かろ、つめたかろ、車の中に居りまして、私は寒くはなけれども、引く身のそなたがつめたかろ、腰にややたてがさしてある。やたてで仇が討てるなり、中から筆助がとんで出た。（藤沢）

鬼神のお松

はるか向うを眺めてみれば、侍姿がかすかに見えるよ、あのやさむらい、ああした旅のつかれか、あしにふみよと、こしの重さを、金子につもれば二百両あまりの仕事に見えるよ。

そこでさむらい、さいぜんから、申し〳〵と呼ばわりまするは、まいましようか、けしようなものか。これにて正体あらわせい。ハイ何をかくしましよ、わたくしはこのしたふもと、名主ブザエ門が娘、福島まちへと、嫁子にやられ、運のないのか、亭主にはきらわれ、姑にはにくがられ、今朝のねおきに離縁状もってかけいだし、持病のしやくでふせりよったものでござります。ハハアア持病のしやくとは、伊勢ではめいほう万金丹、そなさんの病気にはこれを一粒のめば、さつそく全快するであろう。ササ、ながくお手をさまに、ありがとうございます。

「そこでお松は、お薬いただき、のもうと見せかけ、おしろいうずもり、くさばの中へと、お薬を投げすて」ありがとうございます。あなたさまのお持合せのお薬をいただき、わたくしの病気がさつそく全快いたしました。おなごのことで、月に七日の不浄をもち、何とて御礼はできませぬゆえ、この川しもには、こわやおそろい峠がござります。

若き者なら恋路を引かせ、まった年寄りなら、きりごうとう、はたらき、道ごあんないでも致しましよう。

「おなごが先きにたち、音無川へと、おいそぎ、オーンガオンオンオンオンガオーイ」、そこで川の岸にて、おなごをおぶって、川の中へ、ささささとはいれば、浅瀬の川をも、深いといつわり、深さの川をば、浅瀬といつわり、川の中ほど、「これや、さむらい、ようく承れ。金があれやこそ命は終る。金はこの世のかたきであるぞ、おのれ宗旨は真言宗か、日蓮宗か知らねども、この川しもへ流れゆき、とんぶからすの餌じきになると、おのれ勝手しだいにしやがれ」、と急いで別れ、わが家をさして、なお急ぎ、オーンガオーイ。（「藤沢民謡集」）

## 第二節　古写真

### 凡例

本節では、飴屋踊り、万作踊りに関係する写真類を掲載する。写真は提供者ごとに整理し、年代の判明しているものについては明記した。

### 1　土橋の万作踊り

（1）昭和二一（一九四六）年四月五日撮影
（柴原幸雄氏提供）

（2）平成一三（二〇〇一）年、「第二十三回川崎市民俗芸能発表会」出演時の写真

（川崎市文化財課提供）

## 2　長井町飴屋踊

（1）昭和五九（一九八四）年頃、熊野神社で撮影された写真か

（横須賀市生涯学習課提供）

（2）昭和五九（一九八四）年、長井小学校講堂での上演に向けた練習の様子

（横須賀市生涯学習課提供）

（３）昭和五九（一九八四）年、長井小学校講堂上演時の写真（横須賀市生涯学習課提供）

## ３　菊名のあめや踊り

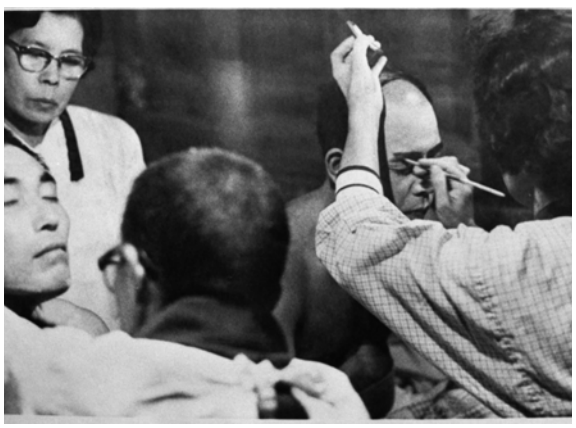
（１）年代不明（昭和三〇（一九五五）年頃か）、菊名上演時の写真（神奈川県文化遺産課所蔵）

（2）昭和三六（一九六一）年、「第三回関東ブロック民俗芸能大会」出演時の写真

（阪急文化財団池田文庫提供）

（3）昭和四〇年代、菊名上演時に菊池忍が撮影した写真（菊池恵氏提供）

（4）「豊川利生記」及び化粧の様子の写真



（三浦市農業協同組合提供）

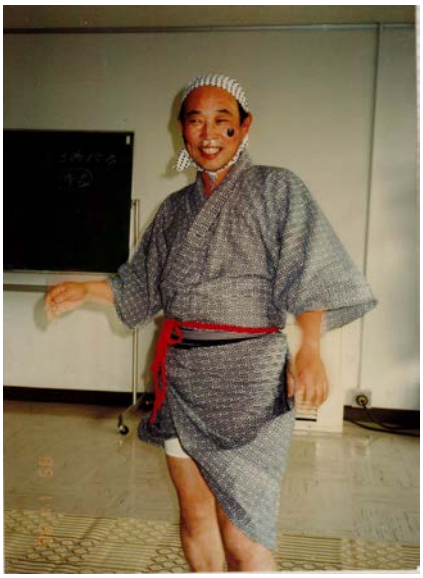
## 4　小黒万作

（1）昭和二一（一九四六）年、「無料理髪散髪者二万人突破祝賀敬老慰安会」で披露された際の写真（林扇千氏提供）

（2）昭和四〇（一九六五）年、「第二回神奈川県民俗芸能大会」出演時の写真

（神奈川県文化遺産課所蔵）

（3）昭和六〇（一九八五）年、小黒楽友会再結成時の写真　（椿トリ氏提供）



## 5　栗木の粉屋踊り

平成一四（二〇〇二）年、「第二十四回川崎市民俗芸能発表会」出演時の写真

（川崎市文化財課提供）

## 6　下宮田の飴屋踊り

撮影年不明、「三番叟」の写真（若宮神社誌より）